



歩みをとともに

特定非営利活動法人 チャイルド・ファンド・ジャパン
東日本大震災 緊急・復興支援事業 報告書

ご挨拶

東日本大震災が発生してから二年が経過します。今もなお困難な生活をおくられている方々をおぼえ、改めて一日も早い生活の立て直しを心からお祈り申し上げます。

国際協力団体であるチャイルド・ファンド・ジャパンは、世界的なネットワークであるチャイルド・ファンド・アライアンスに加盟する11団体からの温かいお支えや日本の各地におられるたくさんの方々の協力からの尊いご寄付に支えられ、東日本大震災の発生直後から、被災された方々に対する緊急・復興支援活動に携わってまいりました。それは、予想した以上に、難しさを伴う経験であると同時に、団体が掲げる「すべての子どもたちに開かれた未来を約束する国際社会の形成」というビジョンの実現に向かって、日本の子どもたちに仕えるよい機会を団体にもたらしました。

二年を超える緊急・復興支援活動を終了するにあたり、チャイルド・ファンド・ジャパンに格別のご理解と大きなご協力を賜りましたことに深く感謝申し上げます。特に岩手県大船渡市の皆様には、活動基盤のないチャイルド・ファンド・ジャパンを受け入れ、私どもと歩みを共にしてくださいましたことに改めて心からの感謝を申し上げます。活動を終了するにあたり、感謝の思いとともに、この事業報告書をお届けいたします。

私たちは、ここで報告する貴重な経験を大切にしつつ、子どもたち一人ひとりの成長を願いながら、ビジョンの実現に向かって励んでまいります。今後とも皆様方のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

主のご加護を祈りつつ、お礼のことばといたします。

2013年3月

特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン

理事長

深町正信

3.11 東日本大震災の惨状

2011年3月11日午後2時46分ごろ、東北の太平洋沿岸で国内観測史上最大となるマグニチュード(M)8・8の巨大地震があり、大船渡で震度6弱の激震が走った。気象庁は本県を含む太平洋沿岸に大津波警報を発令。この地震による大津波が30分後に三陸沿岸に押し寄せ、気仙両市で壊滅的打撃を受けた。12日午後6時現在、200人以上の死亡を確認。陸前高田市では行方不明者が多数出ている。依然、電気、水道、電話などのライフラインは気仙全域で復旧の見通しが立たず、余震も断続的に続いており、住民の不安と疲れがピークに達している。

(東海新報2011年3月13日付) ※マグニチュードは後に9.0に修正



国内最大級の津波が来襲、濁流に呑み込まれた大船渡市街地=2011年3月11日午後4時05分撮影
岩手県大船渡市大船渡町茶屋前 東海新報2011年3月12日付号外掲載写真

■地震の状況

- ① 発生時間 2011年3月11日 14時46分
- ② 震源地 三陸沖
- ③ 震源の深さ 約24km
- ④ 震源の規模 マグニチュード9.0
- ⑤ 震度 震度6弱

■津波の情報

- ① 津波警報
 - 大津波警報 2011年3月11日 14時49分
 - 津波警報に切り替え 2011年3月12日 20時20分
 - 津波注意報に切り替え 2011年3月13日 7時40分
 - 津波注意報解除 2011年3月13日 17時58分

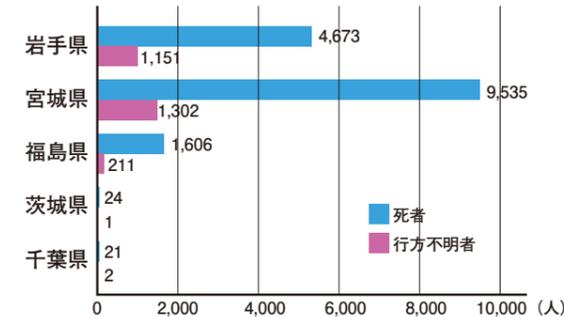
■東日本大震災 被害状況

人的被害	
死者	1万5,881人
行方不明者	2,668人

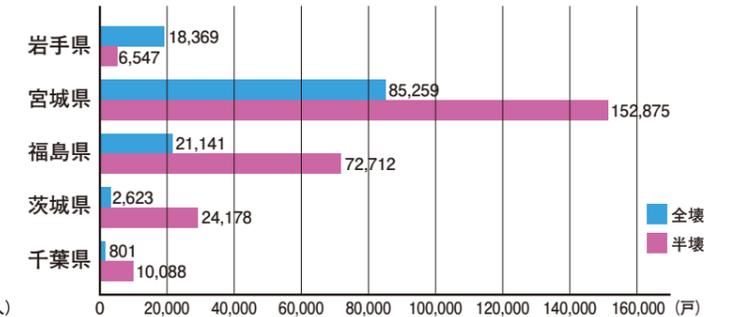
建物被害	
全壊	12万8,801戸
半壊	26万9,659戸

※2013年3月8日現時点(警察庁緊急災害警備本部)

■死者数・行方不明者数(県別)



■建物被害数(県別)



活動のタイムライン

これまで国際協力NGOとして36年間フィリピン、ネパールを中心に支援活動をしているチャイルド・ファンド・ジャパンは、2011年3月16日に東日本大震災被災地域への支援活動の実施を決定。日本国内での支援に初めて着手した。同年5月から当時NGO支援が手薄だった岩手県大船渡市に職員を常駐させ、地域に根ざした支援活動を開始。11月より活動を大船渡市に集約して行い、被災地の方々と「連携」「協働」を図り、継続的な支援で復旧、復興へのサポートを行った。

緊急期

- 2011年3月
- ◎支援開始決定
- ◎JANIC情報交換会
- ◎ルーテル学院大学との協働開始
- ◎緊急支援物資の搬送(宮城県名取市)
- ◎ラジオ福島出演(緊急支援実施状況)
- ◎We are with you!プロジェクト開始



被災地へ支援物資搬送

- 2011年4月
- ◎緊急支援物資搬送(宮城県名取市、石巻市)
- ◎東日本大震災支援全国ネットワーク(JCN)
- ◎緊急支援物資搬送(石巻市)
- ◎被災後の子どもたちのケアの手引き完成
- ◎船戸義和プロジェクトマネージャー着任

復興期

- 2011年8月
- ◎夏祭り・納涼祭
- ◎はまっぺし持ち寄り食事会
- 2011年10月
- ◎「大船渡市復興支援プログラム計画書」策定
- ◎斉藤弘子プロジェクト・コーディネーター着任
- ◎チャイルド・ファンド・アライアンス事務局長 ジム・エマソン大船渡市訪問

- 2011年11月
- ◎沿岸南部杯少年野球大会
- ◎グリーンフックプログラム(大船渡市)
- ◎子どもたちのケアプログラム(大船渡市)
- 2011年12月
- ◎遠野拠点閉鎖・大船渡拠点設置
- ◎合澤由夏、浦大介両プロジェクト・コーディネーター着任
- 2012年2月
- ◎友結ファーム
- ◎読み聞かせサポーター

復旧期

- 2011年5月
- ◎緊急支援物資搬送(盛岡市、大船渡市)
- ◎岩手県大船渡市災害ボランティアセンター訪問
- ◎遠野拠点設置
- ◎日本基督教団奥羽教区との協働開始
- 2011年6月
- ◎福島大学災害復興研究所シンポジウム参加
- 2011年7月
- ◎日本基督教団北海教区から長期ボランティア(2カ月)
- ◎JICA帰国隊員等NGO活動支援制度を通じて2名のインターン受入(6カ月)
- ◎子どもたちのケアのワークショップ(岩手県滝沢村)



津波に流され岸壁から900m近く離れた住宅街に打ち上げられたタグボート船

復興期

- 2012年3月
- ◎越喜来仮設保育室建設
- ◎大船渡小学校備品整備
- ◎卒業アルバム制作支援
- 2012年8月
- ◎夏祭り・納涼祭
- 2012年10月
- ◎長洞仮設団地地域公民館建設
- 2012年11月
- ◎沿岸南部杯少年野球大会
- 2013年1月
- ◎赤崎中学校備品整備
- ◎卒業アルバム制作支援
- 2013年3月
- ◎活動報告会(東京都)
- ◎ありがとう大船渡(大船渡市)
- ◎活動終了



被災したJR大船渡駅西側に整備された大船渡市内最大の仮設商店街「おふなと夢商店街」

コラム

地震発生当日の夜から、チャイルド・ファンド・アライアンスの加盟国11カ国から相次いで被災地域の方々への支援の可能性についての問い合わせが届けられた。また、国内の支援者からは被災した方々への支援のため寄付が届け始めた。「We are with you! あなたはひとりじゃない!」 私たちは、国内外から寄せられた励ましや期待の声に力を得て、緊急・復興支援に着手した。



子どもたちのために何ができるか...2001年9月11日にアメリカで起きた同時多発テロ事件でも、多くの子どもたちが心のケアを必要とした。医療や臨床心理の専門家だけでは対応しきれないという認識のもと、子どもたちと日常的に接する大人のために、子どもたちのケアのマニュアルの作成、配布に協力した経験を踏まえ、「被災後の子どもたちのケアの手引き」を作成することとなった。



「被災後の子どもたちのケアの手引き」は、原本となった英語版の翻訳をボランティアの方々の手分けして担い、絵本作家のぶみさんが挿絵を提供、ルーテル学院大学臨床心理学科の専門家チームによる不眠不休の執筆・監修を経て震災発生後1カ月で発行することができた。震災で大きな影響を受けた多くの子どもたちを支える方々の手元へ一日でも早く届けたいという思いが結集した。同年10月には、英語、中国語、ハンガリー語、フィリピン語の翻訳版も作成



酪農学園学生ボランティアとの協働活動は、海水などで傷んだ写真の修復作業、避難所の実態調査やマップ作り、大船渡教会での支援物資の配布から始まった。



チャイルド・ファンド・アライアンスのジム・エマソン事務局長は、海外からの応援を携えて2度にわたり大船渡を訪問した。被災地で活動する対人援助の専門家を支えるグリーンフック・プログラムの最初の現場は宮城県石巻市に設置された福祉避難所。避難所が閉鎖された9月末まで、避難所で生活を余儀なくされた方々を支え続けた専門家たちの活動を支えるプログラムを5回実施。



目次

ご挨拶	1
震災概要	2
タイムライン	4
活動報告 大船渡市復興支援プログラム	
プロジェクトI	7
プロジェクトII	15
プロジェクトIII	21
メディア掲載	26
活動にあたって	28
受け入れボランティアの記録	30
事業評価報告	32
実施案件情報	47
団体紹介	48

プロジェクトI

仮設住宅団地のコミュニティ形成

絆を育てる。

2011年8月13日、岩手県大船渡市大船渡町地ノ森仮設団地。入居から3カ月が経過し、顔なじみとなりつつある住民同士の交流を、さらに深めようと企画された「納涼祭」。団地の方々と一緒に制作したベンチによって、くつろぎの場が生まれた。



震災後間もない2011年4月。緊急支援を開始した国際協力NGOの情報交換会で「岩手県はNGOの受け入れがやや遅れ気味」という情報を得て、調査のために岩手県社会福祉協議会を訪問した。甚大な被害を受けた沿岸部の市社協のサポートが急務と聞き、さらに遠野市社協を訪問し、沿岸市社協への支援状況について協議し、大船渡市へとつながった。

5月から大船渡市災害ボランティアセンターの活動に参加した。学生ボランティアの受け入れによって継続的な活動体制を確保し、仮設住宅の聞き取り調査を開始した。調査を通じ、コミュニティ形成の必要性が浮かび上がった。さらに、子どもたちが学び、遊ぶ機会が著しく損なわれている状況への対応が必要であることは明らかであった。こころのケアの取り組みの必要性も、早い時期から指摘されていた。これらの課題解決につながる取り組みのサポートを目指して、「大船渡市復興支援プログラム」に活動を集約することにした。

大船渡市は岩手県の太平洋沿岸南部に位置している。震災前には約15,000世帯、およそ41,000人が暮らしていたが、大震災により大きな被害を受けた。

東日本大震災による岩手県大船渡市の被害状況等 (2013年1月31日現在・大船渡市役所調べ)

■被害状況			
① 人的被害	死者 340 人	・	行方不明者 80 人
② 建物被害	5,534 世帯	(全壊 2,787、大規模半壊 430、半壊 717、一部損壊 1,600)	
③ 物的被害	判明分	約	1,077 億円
■津波到達			
大船渡市第1波観測	14時54分	0.2m	(当日気象庁発表)
大船渡市最大波観測	15時15分	3.3m	(当日気象庁発表)
〃	15時18分	8.0m以上	(3/23 気象庁発表)
〃	時間不明	11.8m	(4/5 気象庁発表)



一緒につくりませんか？

ベンチづくりから生まれた交流

支援のありがた

大津波襲来によって、長年暮らしていた家屋が流された方たち。大船渡市内だけで、ピーク時には8000人以上が各地の避難施設に身を寄せた。衣服や家財道具を失い、支給される食事は種類が限られる。苦しい生活が

続く中、全国から駆けつける炊き出しボランティアや物資支援を届ける活動が展開されていた。

見ず知らずのボランティアや支援団体から、思いが込められた物資やサービスを受け取る方々。しかし、ニーズに合ったものでなければ、逆に混乱を招くこともある。

被災地の暮らしは、日々変化を続ける。各地に仮設団地の形成が進んだ2011年6月、プロジェクトマネージャーの船戸は現地の方々が何を必要としているのか、調査を重ねていた。

語り合う場所

何気ない会話から始まる人のつながり。地域で培われてきたこのつながりは、震災で打撃を受け、同じ団地に住む人を知らないという方々が増えていた。

仮設住宅は、避難所とは異なり、プライバシーはある程度守られることになったが、逆に団地に住む方々が顔を合わせる機会をどうつくるか。交流の場確保など、見え始めている課題もあった。

一つのアイデアとして上がったのは各通路に誰もが気軽に腰を落ち着かせることのできるベンチ。2、3人が座れる単純な構造で、持ち運びもできるものが必要だった。広く呼びかければ、「支援」として、完成品を手に入れるこ

とができたかもしれない。しかし、スタッフは団地の方々に、こう声をかけた。

「一緒に、つくりませんか」。

84戸の仮設住宅が建設された三陸町越喜来(おきらい)の杉下仮設団地。夏休みに入った子どもたちが、スタッフやボランティアとして一緒に作業を進めた青山学院大生の輪に、加わってくるようになった。

ここから始まったベンチづくりは、その後各地に広がることとなった。

作業を経た変化

必要なものをみんなで作る。だが最初は、良い反応ばかりではなかった。

「俺はやらない。ほっといてくれ」。

ある男性には、不機嫌そうな表情で断られた。

作業開始後40分、現場に姿を見せたのは、この男性だった。しばらく、ベンチづくり作業を眺めていた後、こう言った。「もつと、こうすればいいんだ」。

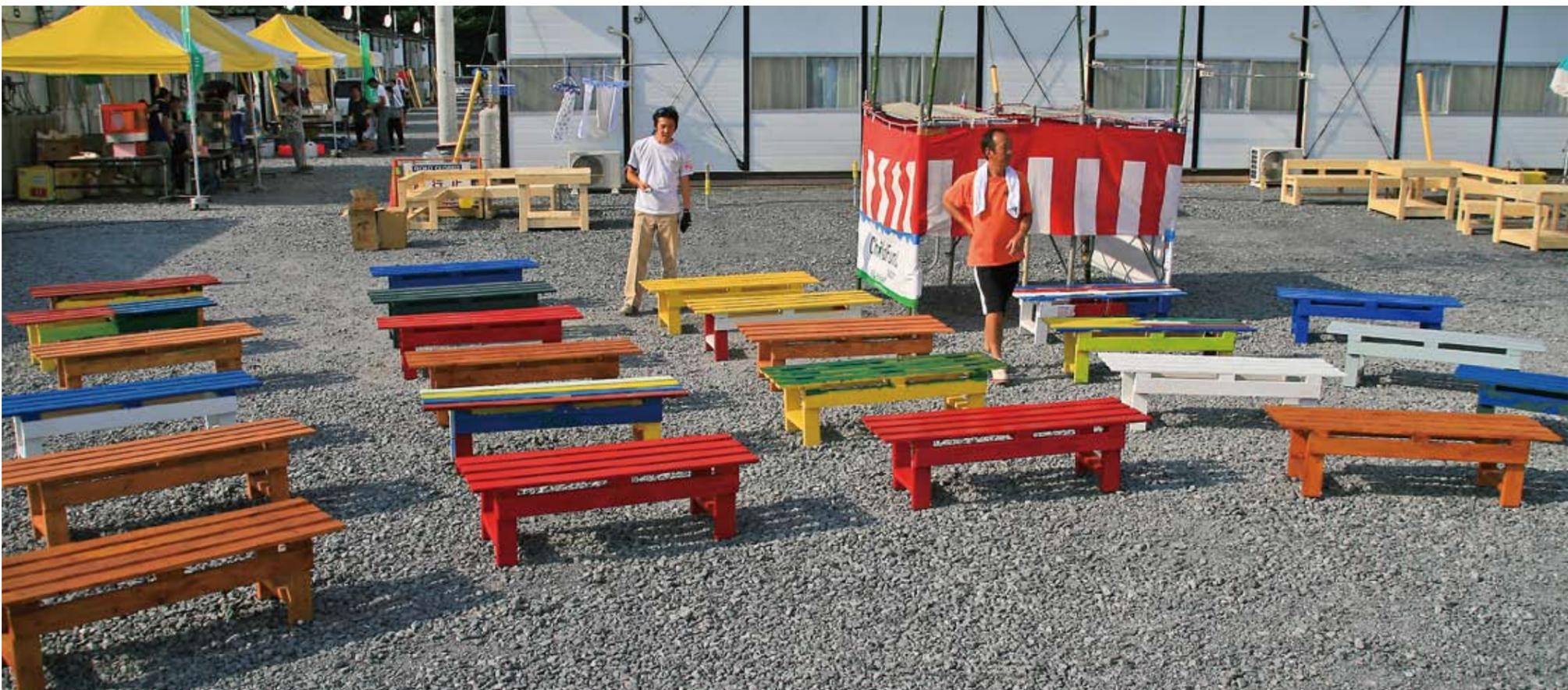
男性は学生ボランティアの金槌を取り上げ、組み立てを指示し始めた。釘を打ち込むごとに、作業を共にする人との間に笑いが生まれた。誰でも最初は作業の輪に入りにくい。

作業を終え、男性は「お茶のみ」にも加わった。明らかに、作業前とは表情が変わっていた。

被災後、ものづくりの機会からも離れていた。ベンチには思い思いの色が塗られ、仮設団地には彩りが増した。

団地に人々の思いが集い、少しずつ形が見え始めていた「コミュニティ」。チャイルド・フアンドジャパンや青山学院大学、酪農学園大学の両学生ボランティアは、盆踊り大会の開催支援に加わった。

同じく一緒にベンチを整備した大船渡町の地ノ森仮設団地(72戸)。ベンチを駐車場に並べ「納涼祭」が開かれた。団地に暮らす方々とともに飾り付け



納涼盆踊り大会のために並べられたベンチの数々。



ペンキ塗りは女性たちの得意分野。花柄も加えてひとつだけのオリジナルベンチに。



こんな効果がありました。

～2011年夏、地ノ森仮設団地～



14:47
男性A「なんと、きょうもぬぐい(暑い)ごと」
男性B「んだ、んだ」

15:05
男性C「ありゃ、元気だか?」
男性A「なんと久しぶりだごと。
自転車に乗ってどこに行ってきたの?」

男性D「は、皆さんお揃いで楽しそうに
何の話してだの?」



15:14
女性A「あんだあ、オラも
はめて(入れて)けらい」

15:24
女性B「いいどこさ、いだごと。
ちょっと教えてほしいことあるのす」

15:27
男性A「…なんと、やかましく
(うるさく)なってきたこと」
男性B「んだ、んだ」
男性A「あっちのベンチさいぐが」



15:31
男性E「なんとよくしゃべるごと…」

15:32
女性B「立って話しかかりしないで、
まずすわらい(座りましょう)」

15:34
女性たち「このベンチがあって、
あっだけ(とても)助かっているのす!」

※推測される会話を地元の方言・気仙語で表現してみました。

東日本大震災から初めての夏。とくに7月は、うだるような暑さが続いた。プレハブ型の仮設住宅はエアコンがなければすぐに室温が上昇する。だが浜風が入る大船渡は、屋外に出れば涼しさを感じることができる。各通りに置かれたベンチは、涼とにぎわいをもたらした。

た屋台やテントが並び、焼きそばや焼き鳥などを提供。津軽三味線の演奏や『大船渡音頭』に合わせた盆踊りも行われた。「ストラックアウト」など、子どもたち向けの企画も多く、会場には終始笑い声や歓声が響き渡った。

お盆行事は、亡くなった方々の供養として、地域で毎年脈々と続けられてきた。単に「開催」しただけでなく、地域によっては、震災によって途絶えかけていた「伝統」の継続にもなった。

杉下仮設団地では8月14日に第1回納涼盆踊り大会が開催され、輪踊りや屋台コーナーを楽しみながら交流を深めた。盆踊り大会は、仮設入居者同士の顔合わせ会も兼ねたもので、同仮設団地の「あそーと48」(自治会青年企画部)が地道に準備を進めた。

私たちは、学校法人青山学院のボランティアらの協力を得て、会場設営、当日のイベント準備はもちろん、企画段階から自治会と祭りをつくりあげた。

ただし、祭りの開催自体が私たちの目的とならないよう気を配った。目的は人のつながりを生み出すこと。そして、私たちはその機会づくりができるに過ぎない。ベンチはあえて電動工具を使わずにつくった。作業時間が短縮され、機械音で会話の機会が減るからだ。祭りでは人気のテントを奥に配置し、帰り際に人が出会えるようにベンチを置いた。



た。祭りやベンチはコミュニティ形成のための「道具」なのだ。

ベンチによって、会話が増える。団地内でイベントが開催できる。そして、人のつながりが生まれる。2年間で手づくりしたベンチは約300脚。各地で蒔いたベンチづくりという種が利用する方々によって育てられ、助け合いのあるコミュニティとして花咲くことを願う。

波及する制作効果

ベンチづくりの効果は、仮設団地に暮らす人々だけではなかった。制作をともに行ったボランティアの大学生にも、かげがえのない大きな財産が生まれた。

「例えば、ベンチの作り方を知らなくてもいい。知らなければ、団地の方々に聞く。私たちが聞き回ること、地域全体のコミュニケーション充実につながることもある」。

「一方通行ではなく、心のこもった相互通行による『対等』が、最終的に被災された方々が自分の力で立ち上がることのできる状態へ繋がるのだと思います」。

毎日行ったミーティングの中で、学生たちから寄せられた言葉。仮設住宅での活動経験を通して、支援のあるべき姿の一つを見出していた。

畑づくりから見たもの。

ながほら
友結ファーム ～長洞仮設団地での取り組み～



308戸の仮設団地

大船渡市には県内最大の仮設団地が形成された。猪川(いかわ)町の高台に広がる長洞(ながほら)仮設団地は、プレハブ長屋型で308戸分が整備された。

猪川町は、津波浸水を免れた内陸部に位置する。仮設住宅は「コミュニティの維持」という考え方から、なるべく被災した地区内で建設された団地に入居できるよう調整が行われてきた。

しかし、リアス式海岸である岩手沿岸はもとも、平地が少ない。長洞は沿岸各地区から被災者が集まり、「一大住宅地」となった。その中で、ゼロから絆

を深めて信頼関係に溢れる地域社会を形成し、直面する課題とどう向き合うか。住宅再建までには長期化が見込まれる中、当面の暮らしやすさを確保するためには、住む方々による行動力も必要だった。

ルーツは「食事会」

自発的なコミュニティ形成には団地の方々が「支援される」という関係だけではいけない。私たちは活動の早い段階から、この視点を大切にしていた。

そこで、長洞などで開催してきたのが「はまっべし(気仙語で「入りましょう」の意、持ち寄り食事会)。支援者が食事を用意するのではなく、参加者が各自宅で調理した野菜炒めなど、「一品ととも」に集会所に集まり、それぞれの「家庭の味」を楽しみながら交流を深め合った。しかし、食事会だけでは交流が「点」で終わりがちになる。より継続的、主体

的に取り組む環境はないか。アイデアとして生まれたのは、畑づくり。団地に住む方々の多くも、震災前は各家庭にあった畑で手を動かしていた。震災から一年近く「育てる」環境から遠ざかってきた。

私たちは、農作業の場所確保に向け、関係機関と調整。道具を調達し、畑づくりという「種」をまき、新たな取り組みが始まった。畑の名は「友結(ゆうゆう)ファーム」。参加した方々が友と友を結ぶ場となるように、との願いを込めて名付けた。

幅広い世代が集う

土づくり、草むしり、畝づくり…。収穫までには、さまざまな作業を重ねる。個人区画ではなく「みんなの畑」であり、一人で畑に向かうわけでもない。手は土で汚れ、腰には疲れがたまる。それでも、作業を終えて道具を運びながら

「支援する・される関係」からの「脱皮へ」



仮設団地に戻る表情は、笑顔に溢れていた。時に作業する脇で子どもたちが遊び、散歩に来た人と言葉を交わす。畑は幅広い世代が集う場となった。

ニンジンやダイコンなど、自らで育てた野菜たち。一部の野菜はメンバーが団地内で売り歩いた。売り上げは次年度の種代となる。各戸を回るうちにお得意様もできた。人々の絆を、強く、大きく、育てる流れにつながった。

「頼りにならない」

私たちも、一緒に汗を流す作業には、



充実感があった。もっと充実した活動にもっと楽しめる環境をと、自然と積極的に動いていた。

仮設住宅暮らしから1年を迎えた2012年6月、畑に通う人々との何気ない会話。酔いが回っていた男性に、笑顔で声をかけられた。

「ファームは、あなたがいなくなったらできない。頑張っているあなたのためにやろうと思ってる」。

もちろん、悪気のある言葉ではなかった。しかし、船戸は愕然とした。「我々が中心になっている」。これではいけない。

「友結ファーム委員会」という参加メンバーの自主運営組織を立ち上げたものの、振り返れば、畑作業に関する連絡や調整は、スタッフが担うようになっていた。どこかに、メンバーの人々が私たちが「指示待ち」になる環境ができていた。以後少しずつ、運営を任せるように、役割の見直しを進めた。

同じ年の9月、畑には、作業の合間にひと息つくことができる「東家（あずまや）」建築が進んでいた。船戸は数日おきに顔を出していた。ある日、毎日作業を続ける男性に声をかけられた。

「また来たか。お前が来ても、頼りにならないからな」。

畑や東屋が彼らのものとなったからこそ放たれる言葉だった。これが目指していた環境だった。

復興の主役

800人以上が暮らす長洞仮設団地。日々を過ごす中で、ニーズも多様化する。各支援団体からも、協働活動やボランティアなど、さまざまな提案を受ける。暮らす人々自身が何が必要かを判断し、どう行動するかを決断する仕組みづくりの必要性も高まっていた。

2012年3月、長洞にも自治会組織が設立された。私たちは8月にこの自治会と協力して夏祭りを開催。当日は友結ファームのメンバーも収穫したジャガイモを調理、販売した。同年10月には、自治会役員と間取りの検討を重ねた公民館を建設、寄贈した。

60人収容の大広間や大きな台所を備えた公民館によって、住民主体による趣味や文化活動の可能性が広がった。また、駐車場や施設利用など、お互いが

快適に暮らすためのルールを決める場にもなる。「仮設であつても自分たちの生活は自分たちで良くする」。私たちが最も大切にしたいこの姿勢は、大船渡に住む方々が主役となった復興への第一歩だ。



「私たちが主役」さらに生活を良くするために。

プロジェクトII

子どもの生活充実

未来のために。

東日本大震災は子どもたちからも「当たり前」だったものを、ことごとく奪った。校舎、大切な仲間との時間。恒例行事や、子どもたちの思い出づくりも、被災地では手が回る状態ではなかった。子どもたちの生活充実を目指した活動を進めた。



卒業アルバム制作支援



学童野球大会支援



読み聞かせ事業サポート

地域に根ざした団体を支える ～読書ボランティアとの協働～



終わりを見据えて

期間限定で活動する私たちは、その終了後を見据えてプロジェクトを進める。その意味で地域への働きかけを行う地元団体・組織との協働は重要だった。地域の文化、地縁といった私たちが得意としない部分で活躍しながら、5年、10年という長期的な視点から活動できるからだ。

協働したいいくつかの地元団体の一つ「読書ボランティアおはなしころりん」は2003年に発足。大船渡市内の23歳から80歳までの女性27人で、子どもたちに読書の楽しさを伝える社会教育活動を展開している。

最初の出会いは2011年6月。永沢仮設団地（大船渡中学校）で聞き取り調査を行っていた船戸は、絵本を運び込んでいた江刺代表を紹介された。避難所で読み聞かせをしている、という言葉からは、明確な目的意識とエネルギーがあふれていた。地元団体として震災直後から活動されていることに心を動かされ、強い印象を受けた。

「何かできることがあれば、ぜひ一緒にしましょう」と約束した。

約束が実現したのは半年以上が経過した2012年1月だった。岩手県で公募のあった「新しい公共の場づくりモデル事業」の震災関連案件（助成金）へ

の応募を検討していた江刺代表から連絡があった。集会施設が被災し、文化・生涯学習活動の場が奪われ、高齢者や仮設団地で生活する人々が引きこもりがちになる傾向を気にかけていた。新たな取り組みへの模索。おはなしころりんが主導する事業をサポートする形で協働が始まった。

やってみよう

膝を突き合わせて事業を練り上げる日々が続いた。県の採択を勝ち取った事業の名前は「やってみようべし読み聞かせ」。「やってみようべし」とは気仙語「地元の方言」で「やってみようよ」の意味だ。仮設団地を中心に市内全域を回り、子ども向けに読み聞かせを実践する大人たちを増やす。読書の楽しさを伝え、仮設住宅に住む大人たちの「生きがい」や「つながり」発見をも目的とした事業だ。

対象者、目的、事業名など、それぞれのアイデアが絡み合うようにして作り上げられたこの事業には、おはなしころりんが日頃から提携していた市立図書館も加えられた。また、私たちが連携していた市社会福祉協議会にもその輪を広げて、7月から実施された。絵本の紹介や朗読、紙芝居、エプロンシアター、さらには軍手人形による人形劇や

手話など、盛りだくさんだった。

講座を担った江刺代表やおはなしころりんスタッフの読み聞かせ技術は本物だった。子ども向け、と分かっているも自然と物語に引き込まれた。地域に伝わる昔話が紙芝居として気仙語で語られ、会場は一体感と温かさに包まれた。

事業を通じた大人の参加者は予想を超える898人。中でも3回の講座に出席し、読み聞かせの実践を行った参加者には修了証書と独自に製作した読み聞かせのテキストブックを贈呈した。物語を聞いた子どもたちは合計206人になる。

参加者からは「帰ったら孫に読み聞かせをやってみる」「読み聞かせがこんなに楽しいとは」などの声が聞こえ、関係者に笑顔が広がった。

ひとつのチーム

協働団体として最後のミーティングを行った2013年2月。明確な役割分担のもとに相乗効果が生まれていたことを振り返った。それぞれ所属する団体のスタッフとしてではなく、この事業を実施したひとつのチームとしての意見交換だった。おはなしころりんは来年度に向けて、同様の事業を行うための準備を進めている。遠く離れても私たちの思いはつながっている。

今は強い仲間意識

他団体と共同で活動するのは初めてのことで、最初は不安で戸惑っていました。

しかし、チャイルド・フアンド・ジャパンのスタッフは壁をつくらぬ人柄で、相談しやすかったですね。

正直、彼らには最初は少し頼りない印象もありましたが、私たちでは浮かばないアイデアをいただき、今では強い仲間意識を持っています。今後は、地域の人々が地域の子どもの育てることを促進するような活動を展開したいと考えています。

読書ボランティアおはなしころりん 江刺 由紀子 代表



「野球ができる」「喜びを将来にも

沿岸南部杯少年野球大会への思い

将来を見据えて

外に立ち続けていると、浜風に冷たさを感じるようになった2012年10月下旬。大船渡市内外を会場に、第8回沿岸南部杯少年野球大会が開催された。

本年度も岩手県沿岸各地や内陸部から31チームが参加。3日間にわたり、子どもたちはこれまでの練習成果を発揮し、はつらつとしたプレーが相次いだ。

現在は学童野球の1年を締めくくるとして定着しているが、かつて多くの大会は、子どもたちが最も成長するとされる6年生の夏前に終わっていた。伸び盛りの子どもたちを競わせ、これまでベンチを温めてきた選手にもプレー機会を——という保護者たちの願いから、手づくりの大会が始まった。

第6回大会の2010年までは、大船渡市三陸町越喜来の山村広場などを会場として主に同地区に住む保護者らで組織された大会実行委員会が開催

を続けてきた。しかし、震災以降、会場には仮設住宅が建設されるなど、三陸沿岸のスポーツ環境は一変した。

第7回大会は開催が危ぶまれたが「大会をやりたい」という子どもたちの声に背中を押された実行委員と保護者たち。試合ができるグラウンドを確保し、開催にこぎ着けた。私たちが賞品提供などで協力した。

当時は、震災発生から1年も経過しておらず、まだ将来的な展望を考えると、ことは難しかった時期。こうした中でも、森正喜実行委員長から、第8回大会に対する支援要請を受けた。

野球を愛する子どもたち、保護者、そして三陸沿岸の将来にとって、本場に役立つ支援とは何か。見出した二つの方向性は「第10回までの開催を視野に入れた運営体制づくり」だった。

実行委員との話し合いを重ね、私たちは継続的な開催に必要な備品と大会運営費を提供した。参加チームは、社会貢献活動を行うことを条件に、参加

料の半額が免除されることになった。

第8回大会は、参加全チームがごみ拾いなどの社会貢献活動を展開。子どもたちはプレーできる喜びを感じるだけでなく、「地域に支えられている」ことを実感し、そして自分たちも「地域に貢献する」という意識を高めた。

今大会で得た参加料は、9、10回大会の運営費となる。しかし、大会を開催すれば、どうしても地元スポ少の保護

者負担は大きくなる。現段階では、11回大会以降のあり方に、確固たる道筋は見えていない。

ただグラウンド上での子どもたちの笑顔は、「また来年も」という思いを関係者に抱かせる。大会が自立していくために、開催を「点」から「線」にしていくために、地域の大人たちは将来を見据えている。

好試合相次いだ第8回大会

大会は7イニング制によるトーナメント方式で、3日間にわたり熱戦が展開された。準決勝はいずれも1点差ゲーム。白熱した好試合が相次いだ。決勝に駒を進めたのは、準決勝で3度の優勝を誇る強豪チームを撃破した初出場の伊手スポ少(奥州市)と、大船渡野球スポ少。大船渡は3回に2点を先制されるものの、6回に4点を挙げて逆転勝利を収めた。

閉会式では、プロ野球選手から贈られたサインボール、色紙が出場選手たちに贈られた。

▽準決勝

伊手 2-1 末崎
大船渡 4-3 赤崎

▽決勝戦

伊手 0020000 | 2
大船渡 000004x | 4





思い出を大切に

卒業アルバム制作費を支援

震災後、激動の日々を過ごし続けた子どもたち。学習机がある家屋を失い、ランドセルをはじめとした学用品が流された児童だけでなく、浸水を免れた地区でも、学校活動再開までは長時間を要した。

行政側は、公的支援の一つである被災児童生徒就学援助事業で、被災後金銭面で不安を抱える世帯を支援。しかし、卒業後も思い出を振り返ることができるアルバム制作費用は含まれていなかった。

各小中学校への有効な支援を模索していた私たちは大船渡市立猪川（いわね）小学校の鈴木二司校長を訪ねた。「卒業アルバムのページ数を減らして、安くしようと思っている」。鈴木校長が事務局を担う市小中学校長会は、保護者側による制作時の費用負担を懸念していた。

私たちは市内小中学校22校に在籍し、卒業を控えた小学6年生と中学3年生合わせて800人余りに対して一人5000円を支援。子どもたちには、

例年通りのアルバムが届けられた。

卒業式を間近に迎えた2012年3月15日、猪川小学校の6年生55人には、事務局長の小林から完成したアルバムが手渡された。同家校庭には仮設住宅が建ち並ぶ。保護者の勤務先の多くは、被災による取引先減が業績に響いていた。

子どもたちは受け取ってすぐにアルバムを開き、友達同士で笑い合いながら歓声を響かせた。小林は「アルバムと、そこにある思い出をこれからも大切にしてください」と呼びかけた。

6年間をともに過ごした絆。アルバムがあれば、大人になっても、小学生時代に戻り、笑顔で語り合うことができる。

この支援を進める中で、最も多く尋ねられたのは、次年度にも同様の支援を行うかだった。学校側としては不確実な支援をあてにすることは出来ない。私たちはこの時、2013年度にも同様の支援を行うことを約束し、同時に同年度をもつて活動を終了することを伝えた。

プロジェクトⅢ

子どものこころのケアと
グリーンワーク

輝きをこれからも。

近隣には被災の爪痕が残る中、元気づけたい子どもたちが笑顔を輝かせ、生活を続けている。仲良く暮らし、笑顔を絶やさないためには、周囲の大人たちに対するケアのあり方も重要となる。



埋もれがちな「不安」に寄り添う



なくならない「悲嘆」

悲嘆、グリーフ——。震災発生から日が経つにつれ、支援の重要性として耳にするようになった言葉のつだ。グリーフとは英語で「深い悲しみ」を指す。

悲嘆感情自体は、悲しい体験をすれば誰にでも生まれる。だが、心のためこみ続けていけば、病的な状態になることもある。不安や絶望感が複雑に絡み合う感情によつて精神的に不安定となり、耳鳴りや目のかすみ、睡眠障害など身体的な変化にもつながる。

甘えられ、心を落ち着かせる環境が、身の回りにあるか。長期的な支援が求められる中、地域にグリーフケアを根付かせなければならぬ。今抱える不安へのケアと、将来の土壌づくり。短期と長期、被災地は両方の視点に立った行動が求められている。

一方、「子どものこころのケア」のプロジェクトは、私たちが子どもと直接向き合うものではない。周囲の大人が子ども心の状態を知り、子どもへのサポート

トを担えるためのものだ。大人が今後も子どもたちの変化に対応し、ケアできるために支援したのが特徴のつだ。

見えにくい「不安」

大船渡市大船渡町に園舎がある大船渡保育園。大津波は、園庭のすぐそばまで押し寄せた。園庭から海側を見渡すと、震災前にあつた市街地はなく、仮設店舗や更地が広がる。子どもたちの多くは、被災地を目にしながら毎日通園する。

同園では、保護者や保育士を対象とした個別相談を実施。また市内の保育園に所属し、社会福祉法人が運営する各保育園でもお茶つこ会や講習会などを開催した。

元気に駆け回る子どもたち。一見しただけでは「子どもたちは元気に遊んでいるので大丈夫」と感じさせる。しかし、個別相談を行うと、母親たちからは悩みが聞こえてきた。
「家に帰ると子どもが親から離れた

がらない」

「暗いところを極度に怖がる」

「夜泣きが激しい」

保育士たちも保育園では見せない子どもたちの様子を聞き、驚きを隠せなかった。改めて心に傷を負っている園児もいる現実を再認識させられた。

保護者との情報交換をより密にし、子どもたちの些細な変化に気づかなければいけない。変化が生じたときは、保護者と速やかに相談できるよう協力していくことの重要性を実感した。

不安や体調の変化は、震災直後の経験だけから来るものではない。例えば周囲で復興に向けた整備を目にする中で生まれる焦り。前に進もうと思っても、一歩を踏み出すことができない不安。日が経つにつれて、格差が生じている面もある。目には見えにくい悩みで苦しむ子どもたちや大人に手を差し伸べ、サポートを続けることが大切だと考えた。

支え合うために……

市内の保育園で働いている保育士も、被災者である。自宅が流され、仮設住宅から通う姿もみられる。家族を亡くした悲しさを、園内では見せずに子どもたちと向き合っている。

日々の業務に追われる中、保育士自身の被災体験や不安を共有し合い、お



元気に遊んでいるから大丈夫ー。でも、寄せられる母親たちからの悩み。

互いの気持ちを理解しあう機会は意外と少ない。そこで、市内の保育士が集まって情報共有をする機会として、「お茶つこ会」を実施した。
業務中は震災についてあまり話す機会のなかった保育士たち。お互いの体験や気持ちを共有し、支えあいの雰囲気を感じ合うことで、自身の心のケアにもつながったという声が聞かれた。
自分の心が癒されれば、他人や子どもたちのこころのケアへ進むことができる。遠回りに見えるかもしれないが、子どもたちを支えるためには、欠かすことができない場でもあった。

今後に備えて

長期的なケアの重要性を見据え、保育士に対しては講習会の場も設けた。現地で日常的に子どもと接する保育士たちが子どもの心の状態をよく理解し、保護者と連携しながら適切な対応につなげる知識を深めてもらいたい狙いがあった。ことばの表現がまだまだ未熟な子どもたちは、大人とは違った表現方法でストレスや不安を表してくる。

参加者は被災後の子どもたちの精神的な状態や反応、大人から受ける影響などについて学習。保護者とのコミュニケーションのとり方やカウンセリング技法についても学んだ。



支える側の立場も抱える「闇」。だからこそ、支える立場をサポートする重要性。

「子どもと同じ目線に立ち、そばに寄り添い言葉がけの配慮が出来ているか、常に原点に立って接するということを改めて感じた」

終了後、保育士から寄せられた言葉。講習会は、明日につながる気づきの場となった。

支援員と相談員

グリーンワーク・プログラムは、子どもに限らず広く対人支援に関わる立場の方を対象に行った。大船渡市内では被災者と直接向き合い続ける「業務」もある。大船渡市社会福祉協議会が震災後「生活支援相談員」を新設したのがその一つ。

当初は同協議会のパートヘルパーや市内の福祉施設から出向した11人だったが、より支援を充実させようと、2011年11月から23人に増員。翌年1月からは自宅が被災してアパートに住む人や自宅を建て直した人たちへの訪問活動も本格的にスタートさせた。

市内に整備された仮設住宅の戸別訪問やサロンなどで心のケアにあたる。相談員らは入居者の生活上の悩みなどを聞きながら、身近な存在となるために努力を続けていた。

例えばお茶飲みなどの「サロン」事業は仮設住宅19団地で定期的に開催。お

茶会の前には、体操や合唱、手芸などレクリエーションも行い、楽しみにしている入居者が多いという。

また、仮設団地には別事業で雇用された支援員が常駐。大阪府内に本社があり、岩手県内陸部に位置する北上市内の工業団地などで人材派遣を行っている(株)ジャンクリエイトが事業委託を受けている。

大船渡市内に整備された37カ所に合わせて約1800戸の仮設住宅を回る支援員も対象となった。

支援員は1人につき30世帯前後の担当が決められ、平日の日中時間帯に見回りを行い、住民に声をかける。また、各地に設けられた談話室や集会所のにぎわい創出も図る役割を担っていた。

時には「話し手」に

地元雇用である相談員も支援員も、生活環境が大きく変わった中で業務を続ける。さまざまな人々と接する仕事であるが故に、自身も様々な不安やストレスを抱えていた。

グリーンワークでは、今後も自信を持って業務を行っていくよう、グループでお互いの業務に対する想いについて話し合ったり、講師が一人ずつ面談。前向きな思いで業務を行うための後押しを図った。



被災者と向き合い、相談員も支援員も「聞き役」の日々を重ねてきた。震災前には経験したことのない業務。ノウハウがある先輩もいない。弱音を吐くとしても「被災者の方がかっと辛いんだ」との思いが先行し、自然と自分を抑えようとしがちになる。

いつも話の聞き役だった相談員たち。自分の思いを聴いてもらうことで、気持ちもすっきりし、終了後は晴れ晴れとした表情を浮かべていた。

「自分に優しくなることが、生きていくために忘れてはいけないことだと思えました」

記された感想からも、前向きな思い

がにじみ出ていた。

褒めて、認め合う

外部支援団体は、活動期間に期限がある。大船渡市での「グリーンワーク」は、長期的に活動を続ける地元支援者がこれからも前向きに、元気に支援を続けるためのサポートとしても行った。

相談員、支援員を対象としたグリーンワークは、それぞれ2回ずつ実施。グループワークや講師との面談に加え、手づくりの「慰めのハート」プレゼントも行った。褒めあい、認め合うことで、自信ややる気の創出、物事を前向きにとらえる狙いがあった。

こうした活動には、専門家の存在が欠かせない。私たちは震災直後から学校法人ルーテル学院との協働体制を築き、「同大学院総合人間学部臨床心理学科」と「同大学包括的臨床死生学研究所」の方々に専門家としてプロジェクトの実施を担って頂いた。

残された課題もある。「グリーンワーク」そのものの概念や必要性に対する認知は、まだこれからの状態。全国的にも、グリーンワークを指導できる専門家は少ない。今回の取り組みが支援者支援体制の強化に向けた好例となることが期待される。



— 専門家の立場として —

ルーテル学院大学
総合人間学部 臨床心理学科
加藤 純 教授

2011年11月に大船渡保育園を訪れてから9回にわたり、市内数カ所の保育園で個別相談や職員研修などを進めた。当初の相談は、被災による恐怖や不安などだったが、次第に大切な人との別れ、避難生活の苦労、新しい仕事や住まいを得る困難などが語られ、また、子どもについての相談から保護者自身の相談になり、保育士の相談も出てくるようになった。

職員が、感性豊かに子どもや保護者の悩みを感じ取り、温かく支えていることを実感した。しかし、保護者は負担をかけることに気兼ねし、自分より厳しい状況に置かれた人に申し訳ないと我慢している。伝え切れない思いを聴き、職員につなぐことが、第三者が入る意義の一つと感じた。

気仙で活動する被災者・復興支援団体

人とのつながり大切に 4人体制で復興後押し

東部の被災地NPO法人「チャイルド・ファンド・ジャパン」(仮称)正副理事(長)は昨年4月から大船渡市内で被災者へ向け復興活動を展開している。仮設住宅でのボランティア活動や小学生の生活支援、被災者の心のケアなど、被災者へのサポートが復興後押しに繋がっている。同法人は「日本大震災復興支援機構」を立ち上げ、被災地活動を展開している。被災地活動の中心は、仮設住宅でのボランティア活動や小学生の生活支援、被災者の心のケアなど、被災者へのサポートが復興後押しに繋がっている。同法人は「日本大震災復興支援機構」を立ち上げ、被災地活動を展開している。



大船渡の復興後押しする船戸プロジェクトメンバー(右から左へ)らスタッフ

NPO法人チャイルドファンド

2012年4月27日付 東海新報に掲載されました

耕論 コミュニティ新生

オピニオン



つながり求めて

被災者が暮らす仮設住宅の自治会は組織されているが、中には代表者や連絡役が決まっている地域もある。

仮設でも自分たちの「まち」

被災地はつながりが強い地域だから……。そうだったかも知れないが、被災で壊れた結びつきを取り戻すのは容易ではない。どうすればコミュニティを守り、育めるか。

船戸 義和さん

78年生まれ。米国の大学院で非営利団体の運営方法を研究。昨年4月、CFJに参加し、震災復興・復興支援プロジェクトの現地責任者となった。

NPOチャイルド・ファンド・ジャパンのメンバー

昨年4月の選挙で大船渡市内で活動している。被災者へのサポートが復興後押しに繋がっている。同法人は「日本大震災復興支援機構」を立ち上げ、被災地活動を展開している。

2012年6月8日付 朝日新聞に掲載されました

被災地コミュニティの今

自立に向けた取り組み①

撤退検討する支援者

問われる住民の主体性

被災地コミュニティの今

被災地コミュニティの今

自立に向けた取り組み②

「支援慣れ」防ぎたい

子どもらでベンチ作り

被災地コミュニティの今

2012年12月12日付・13日付 岩手日報に掲載されました

メディア掲載一覧(2013年2月末現在)

年	日	紙名	掲載内容	
2011年	8月2日	東海新報	長洞団地 ベンチ作り	
	8月14日	岩手日報	地ノ森団地 納涼会	
	8月16日	東海新報	6面 地ノ森・杉下団地 納涼会	
	9月16日	東海新報	4面 ベンチ作り 青学紹介	
	10月9日	朝日新聞 全国版	33面 ベンチ作り	
	10月28日	東海新報	5面 山岸団地 集会所入口軒拡張	
	11月8日	岩手日報	1面 後ノ入団地 干し柿	
	12月1日	岩手日報	22面 沿岸部欄 冬の朗読会	
	12月1日	東海新報	5面 冬の朗読会	
	12月7日	河北新報	24面 ワイド東北欄 冬の朗読会	
	2012年	1月7日	岩手日報	1面 新春書初め大会
		1月7日	東海新報	1面 新春書初め大会
1月8日		読売新聞 全国版	32面 新春書初め大会	
1月13日		東海新報	5面 団体活動紹介	
1月22日		盛岡タイムス	岩手県被災児童の支援機関団体連携交流会	
2月4日		岩手日報	25面 大立団地 節分豆まき	
2月5日		東海新報	8面 大立団地 節分豆まき	
3月17日		岩手日報	31面 猪川小学校 卒業アルバム贈呈式	
3月17日		東海新報	7面 猪川小学校 卒業アルバム贈呈式	
3月25日		東海新報	8面 長洞団地 友結ファーム	
3月31日		岩手日報	7面 越喜来保育所仮設保育室建設	
4月1日		東海新報	6面 越喜来保育所仮設保育室建設	
4月12日	東海新報	7面 大船渡小学校 家具設備贈呈		
4月13日	岩手日報	21面 大船渡小学校 家具設備贈呈式		
4月27日	東海新報	4面 復興支援団体紹介		
4月28日	東海新報	7面 鯉のぼりこどものつどい		
5月4日	東亜日報	27面 韓国語講座		
5月6日	岩手日報	2面 鯉のぼりこどものつどい		
2012年	5月6日	東海新報	1面 鯉のぼりこどものつどい	
	6月7日	東海新報	7面 やってみっぺし読み聞かせ	
	6月8日	朝日新聞 全国版	15面 耕論 コミュニティ新生	
	7月10日	東海新報	7面 赤崎中学校仮校舎備品整備	
	7月11日	岩手日報	24面 長洞地域公民館建設	
	7月11日	東海新報	2面 長洞地域公民館建設	
	7月18日	東海新報	6面 日韓文化交流会	
	7月19日	東海新報	7面 親子・家庭フォーラム告知	
	7月21日	テレビ岩手	「手を、つなごう。岩手」友結ファーム	
	7月29日	朝日新聞 岩手県版	27面 長洞団地 友結ファーム	
	8月5日	岩手日報	26面 いわて親子家庭フォーラム	
	8月8日	東海新報	7面 いわて親子・家庭フォーラム	
8月15日	岩手日報	21面 杉下団地 納涼盆踊り大会		
8月16日	東海新報	8面 杉下団地 納涼盆踊り大会		
8月23日	東海新報	6面 長洞団地 夏祭り		
8月24日	岩手日報	29面 つなぐ被災地コミュニティの今 長洞団地 友結ファーム		
2013年	10月13日	岩手日報	25面 長洞地域公民館建設 引渡式	
	10月13日	朝日新聞 岩手県版	24面 長洞地域公民館建設 引渡式	
	10月13日	東海新報	7面 長洞地域公民館建設 引渡式	
	10月16日	読売新聞 岩手県版	33面 長洞地域公民館建設 引渡式	
	11月17日	東海新報	7面 教育復興運動市町村・地域活性化研修会	
	11月20日	東海新報	6面 長洞団地 友結ファーム 干し柿	
	12月12日	岩手日報	23面 自立に向けた取り組み④	
	12月13日	岩手日報	25面 自立に向けた取り組み⑤	
	1月9日	東海新報	3面 白と杵寄贈	
	1月11日	東海新報	6面 永沢団地 餅つき	
	2月4日	岩手日報	23面 地ノ森団地 節分豆まき	

日本国内での緊急・復興支援に携わって



事務局長
小林 毅

1975年以来、アジアを中心に国際協力に携わってきたチャイルド・ファンド・ジャパンは、1990年に発生したマグニチュード7.7のフィリピン・北部ルソン島大地震や1991年に起こった20世紀最大規模のピナツボ火山の大噴火など、比較的大きな規模での自然災害発生後の緊急・復興支援に携わってきました。そうした経験を踏まえて、「緊急支援マニュアル」をまとめて、緊急事態にも備える努力をしてきました。

しかしながら、2011年3月11日の東日本大震災の発生を受けて、チャイルド・ファンド・ジャパンが最初に直面した難題は、日本国内で発生する大規模災害に備えることを

想定していなかったという事実でした。法人の定款には「開発途上国での災害」が明記され、「緊急支援マニュアル」は日本国内での活動について記載がありませんでした。震災発生後、「想定外」という言葉が多用されてきましたが、チャイルド・ファンド・ジャパンも例外ではありませんでした。大規模災害が海外の支援国で発生した場合は、すぐに緊急支援の実施に向けた検討・調整が始まりますが、東日本大震災発生後の初動体制は、海外のそれに比べ遅れたと言わざるを得ない状況でした。

さらに、備えが充分ではなかったという事実は、緊急・復興支援に携わる人材確保の遅れ、緊急復興支援の活動方針策定の遅れ、復興支援のためのプロジェクト形成の遅れとして尾を引く結果をもたらしました。このようなことを繰り返さないため、チャイルド・ファンド・ジャパンは、岩手県大船渡市を中心とした緊急・復興支援事業に携わることにより得た貴重な経験をもとに、災害リスク管理能力を高める必要があります。

特別な場所

心に刻まれた出会い



プロジェクトマネージャー
船戸 義和

がれきが多く残っていた5月、避難所を聞き取り調査で訪問した私は、ひとりの男性に迎えられた。「生きているし、最低限のものはあるから大丈夫」と時折笑顔を見せる男性に私は言った。「皆さん本当にすごいですね、この状況でも前向きに笑顔で」。それまで重ねた調査から感じた正直な気持ちだった。すると男性の表情は一変し、穏やかだった瞳から涙がこぼれ落ちた。「本当は毎日ものすごく悲しいんだ」。言葉を失い、立ち尽くすしかなかった。想像はできても、私には決して理解することのできない悲しみと、生きる力が紙一重で共存していることを知った。

被災した方々にとって本当に意味

大船渡は第二のふるさと

笑顔・強さそして思いやり



プロジェクト・コーディネーター
齊藤 弘子

屈託のない笑顔。底知れない忍耐力と我慢強さ。気持ちをはかばかにしてくれる温かい思いやり。大船渡の方たちと共に活動し、生活をしていく中で、大船渡は私の第二のふるさととなった。大船渡の人たちは強い。復興に向けて、私たちがお手伝いできたことはほんのわずかだが、その強さで、きっと素敵で魅力的なまちに生まれ変わると信じている。そして、みなさんの笑顔に会いに、また大船渡を訪れたい。

(子どものこころのケアとグリーンワーク担当)

つながりの大切さ

支援に繋がる心と心



プロジェクト・コーディネーター
合澤 由夏

ベンチづくり、夏祭り、コミュニティファーム等の案件に関わった。活動中、地域の人から「感謝してる」、ボランティアから「大船渡にまた来たい」という声を多く聞いた。

親戚でも、親友でもない私は、その声を聞き、「地域の人にとって一番有意義な方法」を探し、支援に繋がってきた。ひととの関係を大切にしながら、それがどれだけできたか。考えると学んだことばかりで、反省点だけが頭をよぎる。

勢いと引換えに大船渡の皆さんにいただいた経験、何処かで誰かに返したい。

(仮設住宅団地のコミュニティ形成担当)

節分豆まき活動体験の

コマ



プロジェクト・コーディネーター
浦 大介

節分の時期に合わせて大立仮設団地で開催した豆まき事業。はじめは、子どもたちに照れがあり、各戸に訪問してあいさつすることも、鬼に豆を投げることも恥ずかしくて拒んでいた。スタッフが子どもたちに声をかけても反応が悪く、話かけられること自体も厭う様子の子も多かった。しかし、次第に慣れてくると、スタッフの指示にも耳を傾け始め、各戸に自然にあいさつして訪問するようになった。チームによっては、子どもたちが自主的に役割分担を決め、訪問してあいさつする子、落花生を補充する子に分かれて動き出した。

(子どもの生活充実担当)



のある活動とは何なのか。復興支援を行うNGOとして、自問自答が続いた。

手探りで始まった大船渡市での2年間に及ぶ活動は、人との出会いによって次第に形づくられた。活動の中心には常に「ひと」があり、実施した案件の一つひとつと共に、前向きに生きる方々の顔が浮かぶ。私たちにできることは、そんな「生きる力」を少しでも多く持った方々へのサポートだった。生きる力が人のつながりを生み、つながりが復興への原動力となる。その効果はやがて子どもから大人までを含んだ全体へ波及し、大船渡のまちを新生させる。

それぞれの出会いは貴重な財産となつて、私の人生に刻まれている。大船渡は私にとって、そして私たちにあって特別な場所となった。感謝と再会の約束を胸に活動を締めくくりたい。



学生ボランティア 304人・10,944時間の記録

(延べ人数、1人6日間、1日6時間の活動)

ボランティア活動における教育的意義

酪農学園大学
高橋 一教授

酪農学園大学では、大学主導で始まった学生ボランティアの派遣を引き継ぐ形で、学生による自主的なグループが活動を続けました。私はこの活動において「もう一つの大学教育的意義を改めて考えさせられました。それは、活動によって学生は「知の主体」「倫理の主体」の触発と形成という課題を、真正面から受け止めることになったからです。

震災「後」の諸課題を担うのは若い人たちです。その課題に立ち向かうために「知の主体」をいかに形成し確立するか。多くの人の喪失感に伝える「倫理の主体」を自らの中にどう築くか。学生たちは、座学ではなく、被災地という現場で五感のすべてを用いてこれに回答する姿勢が求められたのです。

これは、大学における知的・倫理的主体の触発と形成という、現在大学で求められている「知の開発」の過程だったと言えるでしょう。ただし、震災はまだ終わっていません。今なお苦難を強いられている多くの方々に「共感する知性」を持ち、「知の主体」を活かして「行動する倫理」を確立するためにも、これからも継続的な活動を多くの学生に勧めたいと思います。これこそが真の意味における「実学教育」に他ならないと思うからです。

被災地の方々に育てられて

青山学院大学
伊藤 悟教授

青山学院では、新しい試みとしてNPOとの連携によるボランティアのあり方を模索しました。それが、チャイルド・ファンド・ジャパンの現地プロジェクトに学生を派遣するという体制でした。2011年夏には約100名の学生、約50名の教職員や保護者が参加し、学生の一部はさらに自主活動団体へと活動を発展させ、継続的な関わりを続けました。

一貫して行われたのが「コミュニティ支援」です。ベンチづくりでは、金槌も持ったことのない学生たちが住民の方々に参加を呼びかけました。「友結ファーム」の設置や地域のお祭りのお手伝いなども、都会からの学生たちにとっては貴重な体験学習の場となりました。彼らは被災地から多くのことを教えられ、一回りも二回りも成長しました。

震災による苦しみや悲しみ、そして命のはかなさを引きずりながらも、少しずつ笑顔や笑い声が人々の中に飛び交うようになっていく様子を目の当たりにし、私たちは大いに励まされたのです。そして各々に誓ったのです。震災とこの出会いを決して忘れないことを。

最終ミーティング

酪農学園大学獣医学科2年
茨木 美和さん

活動最後のミーティングで、私達が目指す仮設団地の方々と関係性は、「被災者とボランティア」ではなく、「一人の人と人」として対等な関係になることであるということを学びました。一方通行ではなく心のこもった相互通行の「対等」なものが、最終的に被災された方々が自分の力で立ち上がることのできる状態へ繋がるのだと思います。

ミーティングの最後に「この経験はこのままにしておくとの心ももっていない使われたいベンチと同じ。この経験を良い道具として生かしてください」というメッセージを頂きました。ここ大船渡でのボランティア活動の経験や考えたことはこれからの人生において、大変大きな意味をもつものになったと確信しています。チャイルド・ファンド・ジャパンの皆さんや酪ネットの皆さん、同じ8班のみんな、大船渡の皆さん、すべての方に感謝の気持ちでいっぱい입니다。

(2011年12月17日)

1日の学生スケジュール(例)

- 07:30 朝食
- 09:00 出発
- 09:30 友結ファーム着、作業開始
マップの修繕
- 12:00 YSセンターにて昼食、休憩
- 13:00 ベンチ作り・呼びかけ
- 16:00 作業終了
- 17:00 買い物・夕食準備
- 18:30 夕食
- 19:45 ミーティング開始
- 22:00 ミーティング終了、自由時間

受け入れボランティア学生数

- 酪農学園大学……………125人
- 青山学院大学……………174人
- 学習院女子大学……………5人

事業評価全体総括

- チャイルド・ファンド・ジャパン（以下、CFJ）の東日本大震災緊急・復興支援事業は、一定期間に渡って被災現地に根を下ろし、行政や他のNPO・NGOの支援が行き渡らない地域・分野への支援を行うことで、当該地域の受益者に深く浸透し、高い評価を得ることができた
 - 他のNPOやNGOの活動が当時少なかった大船渡を活動地域として選択し、長期にわたって現地で活動することにより、小規模な仮設団地住民にまで受益者を拡大することができた
 - またコミュニティの形成や公的な援助がない保育園への支援など、行政や他のNPO・NGOの支援が行き届いていない分野での活動は、受益者から高く評価されている
- 一方、日本国内での災害復興支援、災害直後の緊急支援を越えた中長期の復興支援など、今回の事業はCFJにとって初めての試みとなる側面も多く、一部スタッフの尽力により最終的に一定の成果を収めることができた反面、事業の拡大・フェーズ進行に意思疎通・体制整備が追いつかず、事業の効果的・効率的な遂行が阻害された側面もあった
 - 緊急支援期には事務局長のリーダーシップに基づいて案件を進めたものの、その時点では次フェーズ以降の目的、目的に基づく組織体制案が存在しなかった
 - その結果、復旧期・復興期には、運営委員が十分に意思決定に関与しない、あるいは現場スタッフが消耗するなどの事態が発生。今回の各種評価でも、復旧期の評価が特に低くなっている
- 今後の災害復興支援活動（特に災害発生直後の緊急支援期以降の復興支援）にあたっては、事業全体の目的を明確化・共有化したうえで、必要な体制・リスクも鑑みた事業範囲・テーマ設定を行うこと、また本部は必要な体制整備、現場は明確に定められたミッションの遂行、理事会はこれら全体の整合性確認を担うという役割分担と、それを可能にする体制の平時からの準備が必要となる

This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent

TOK 130305-CFJ事業評価 v1 2

組織評価と案件評価にわけて事業の評価を実施

評価内容

- 組織体制
- 組織の意思決定が重要な案件

評価項目

- 組織評価
 - 案件実施に対する基盤として事業の組織体制を評価
 - 意思決定、事業を進める組織の形成ができていたか評価
 - また評価は緊急支援期（震災発生～4月）、復旧期（5～10月）、復興期（11月以降）に分けて行う

- 受益者主体性が重視される案件

- 案件評価
 - 受益者主体性が重視される案件に関しては現場主導で行われるため、案件ごとに評価
 - 各案件で評価を行い、最終的に各案件を総合した包括的な評価を実施

This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent

TOK 130305-CFJ事業評価 v1 3

事業評価報告

事業の効果や実施体制を評価・検証するために、経営コンサルティング会社であるベイン・アンド・カンパニーの東京オフィスに同社の社会貢献活動の一環としてご協力いただきました。大船渡市での関係者インタビュー等を通じてまとめられた「事業評価報告」は次のように構成されています。

- ⇒ 全体総括
- ⇒ 組織評価
- ⇒ 案件評価
- ⇒ 改善の方向性

本報告書では、この中から一部を抜粋し原文のまま掲載いたします。

[ベイン・アンド・カンパニーについて]

1973年米国ボストンに創設。現在、世界31カ国に48拠点のネットワークと約5,400名を擁する、世界有数の戦略コンサルティング会社です。クライアントとの共同プロジェクトを通じた結果主義へのこだわりをコンサルティングの信条としており、結果主義の実現のための高度なグローバル・チームワーク・カルチャーを特徴としています。1981年に設立された東京オフィスも、国内およびグローバル企業の最重要経営課題の解決と結果実現のために邁進しております。収益のフルポテンシャル、事業再建、M&A戦略等の分野で高いシェアを有しています。



特定非営利活動法人 チャイルド・ファンド・ジャパン 東日本大震災緊急・復興支援事業 事業評価報告

2013年3月5日

This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent

I-1 長洞団地関連：実施の遅れや継続性担保で評価が低いものの概ね高い評価が得られている

各項目5点満点

評価項目	評価理由	評価			評価がばらつく理由
		全体平均	CFJスタッフ	CFJ外部	
計画立案(目的の実現のために適切な計画が立案出来たか)					
ニーズの把握	受益者のニーズを把握できていたか	5.0	5.0	-	-
受益者の設定	受益者の設定をできていたか	5.0	5.0	-	-
ニーズに対する妥当性	ニーズを満たすために適切な計画だったか	3.5	3.5	-	-
関係者の関わり	効果の最大化、運営の円滑化のための協議ができたか	3.5	3.8	3.2	-
フィードバック	計画を適切に改善できたか	3.0	3.0	3.0	-
計画実施(立案された計画通りに実施をすることが出来たか)					
計画された活動の実施	計画をしていた活動が実施できたか	3.0	3.0	3.0	-
計画期間での実施	計画をしていた期間内で活動が完了したか	2.8	2.8	-	-
計画リソースでの実施	計画をしていた資金・人員で活動が完了したか	3.5	3.5	-	-
効果発現(当初の計画通りの効果が生み出されたか)					
効果測定	実施後に発現した効果を測定したか	3.5	3.5	-	-
受益者の参加	受益者の参加は計画通りだったか	2.9	2.5	3.3	特にファームに関してはより参加者が集まることを期待していた
想定効果の発現	参加者へ想定した効果が実現できたか	3.8	4.0	3.6	コミュニティ形成に対する効果は想定通りのものが発現
持続性(目的とする効果が持続する仕組みが担保されているか)					
効果の持続性	計画によって得られた効果が持続しているか	3.4	3.5	3.2	ベンチやファームなどは継続的に効果は持続している
NPO機能の委譲	撤退後に地元組織へNPO機能の委譲ができていないか	2.7	2.3	3.2	公民館の自立的な運営がまだ軌道に乗っていないとCFJが捉えている

This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent

TOK 130305-CFJ事業評価 v1 24

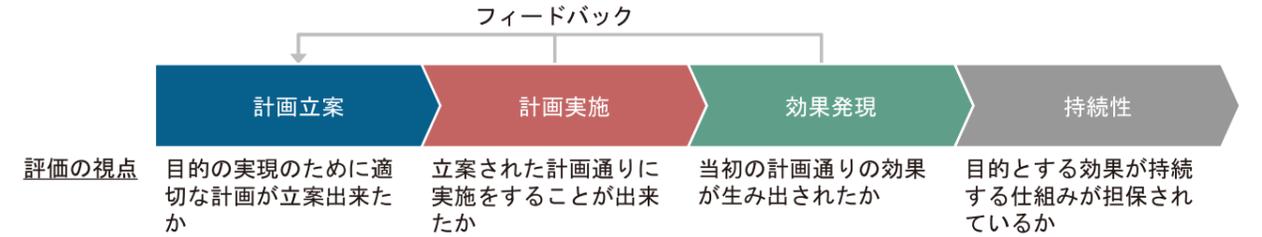
I-1 長洞団地関連：特に資金を必要とした施策にリソース配分を行い、計画からの遅れを抑制するべきだった

計画立案	計画実施	効果発現	持続性
<ul style="list-style-type: none"> 聞き取り調査によってコミュニティ形成の必要性を特定 長洞団地は特に注力すべき団地として設定 <ul style="list-style-type: none"> - 規模が大きく、長期間の残存が想定される - 様々な地域からの移動してきた住民が多くコミュニティが不在が顕著 多くの施策で住民の意見や希望を聞きながら各施策の立案を実施 ファームや公民館設立など計画段階から自治会を始めとする住民との協議を実施 継続的、複数回実施を行った案件では改善を実施 <ul style="list-style-type: none"> - 2度目の夏祭りでは団地内の班長参加を募り、参加者をより拡大 - またファームでは住民間の連絡網を作成することによりCFJが主導することのない連絡体制を構築 	<ul style="list-style-type: none"> 実施を予定していた計画に関しては予定通りに実施 人的リソースの不足から計画より遅れてしまった案件も存在 <ul style="list-style-type: none"> - ベンチ作りは想定より遅れたため、効果が低減した可能性 - また公民館は計画が遅れたために継続性が担保できていない 震災需要によるコストの増加があった公民館建設以外は予算内で実施 	<ul style="list-style-type: none"> 定量・定性両面から効果測定を実施 <ul style="list-style-type: none"> - ベンチの使用率調査や設置数調査、施策への参加者数調査 - 住民や学生ボランティアに対するヒアリング 参加者は概ね計画通りだったが、事前の聞き取り調査が不足していたファームについては想定を下回る ただしファーム参加者に関してはファーム以外の自治会活動にも積極的に参加しており想定以上にコミュニティ形成効果が発現 	<ul style="list-style-type: none"> ベンチやファームは継続的に利用されており、コミュニティ形成に寄与 多くの案件についてCFJ撤退後も継続的な実施が見込まれるが、継続性が担保されていない案件も存在 <ul style="list-style-type: none"> - ファームは自己資金も確保できており、継続的な実施が期待できる - また夏祭りは規模が小さくなる可能性はあるが住民の実施意欲が高い - 一方大きな資金を必要とした公民館は計画が遅れから住民による自立的な運営の目処がつかっていない

This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent

TOK 130305-CFJ事業評価 v1 25

案件評価の枠組み



評価の視点	計画立案	計画実施	効果発現	持続性
評価の視点	目的の実現のために適切な計画が立案出来たか	立案された計画通りに実施をすることが出来たか	当初の計画通りの効果が生み出されたか	目的とする効果が持続する仕組みが担保されているか
評価項目	<ul style="list-style-type: none"> ニーズの把握 受益者の設定 ニーズに対する妥当性 関係者の関わり フィードバック 	<ul style="list-style-type: none"> 計画された活動の実施 計画期間での実施 計画リソースでの実施 	<ul style="list-style-type: none"> 効果測定 受益者の参加 想定効果の発現 	<ul style="list-style-type: none"> 効果の持続性 NPO機能の委譲

This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent

TOK 130305-CFJ事業評価 v1 22

案件評価における評価基準

評価内容	期待以下 (1点)	期待通り (3点)	期待以上 (5点)
計画立案	受益者のニーズを把握できていたか	ニーズの特定を行うための活動を実施しなかった	ニーズの特定を行うための活動を実施し、受益者のニーズを特定した (e.g. 話相手が必要)
	受益者の設定をできていたか	案件に必要な受益者が特定できていなかった	受益者の特定さらに優先順位を特定できた (e.g. xxx仮設団地住民)
	ニーズを満たすために適切な計画だったか	案件と期待効果の関連が論理的に理解できない	案件と期待効果の関連が、現実的な仮定の元に、論理的に理解できる
計画実施	効果の最大化、運営の円滑化のための協議ができたか	案件の立案に必要な関係者と必要な理由を説明することができない	案件の立案に必要な関係者と必要な理由を説明できる。またその関係者全てを巻き込むことができた
	計画を適切に改善できたか	案件の実施に関して問題点があったものの改善ができなかった	案件の実施にともない、実施ごとに改善を行うことができた。改善内容を説明することができた
	計画をしていた活動が実施できたか	計画していた通りに活動を行うことが出来なかった。もしくは未完了	計画していた通りに活動を行うことができた
効果発現	計画をしていた期間内で活動が完了したか	計画された期間を超えて活動が完了した。もしくは未完了	計画された期間内で活動が完了した
	計画をしていた資金・人員で活動が完了したか	計画された資金・人員を超えて活動が完了した。もしくは未完了	計画された資金・人員で活動が完了した
	実施後に発現した効果を測定したか	効果測定を行わなかった	効果測定を行い、案件の改善余地を特定できた。どのような改善余地を特定できたか説明できるか
持続性	受益者の参加は計画通りだったか	計画通りの受益者の参加がなかった	計画通りの受益者の参加があった
	参加者へ想定した効果が実現できたか	案件実施の効果は見られなかった	想定通りの効果が見られた。想定効果と実際の見られた効果を説明できるか
	計画によって得られた効果が持続しているか	受益者への効果は案件実施直後よりも減少している	受益者への効果は案件実施直後よりもよりよいものになっている

This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent

TOK 130305-CFJ事業評価 v1 23

I-3 夏祭り：実施した仮設団地での効果は高かったが、今後の実施見通しが立っていない仮設団地も存在している

各項目5点満点

評価項目	評価理由	評価			評価がばらつく理由
		全体平均	CFJ スタッフ	CFJ 外部	
計画立案(目的の実現のために適切な計画が立案出来たか)					
ニーズの把握	受益者のニーズを把握できていたか	5.0	5.0	-	-
受益者の設定	受益者の設定をできていたか	4.0	4.0	-	-
ニーズに対する妥当性	ニーズを満たすために適切な計画だったか	3.0	3.0	-	-
関係者の関わり	効果の最大化、運営の円滑化のための協議ができたか	3.8	4.0	3.5	-
フィードバック	計画を適切に改善できたか	3.7	3.5	3.8	-
計画実施(立案された計画通りに実施をすることが出来たか)					
計画された活動の実施	計画をしていた活動が実施できたか	2.6	2.3	3.0	-
計画期間での実施	計画をしていた期間内で活動が完了したか	3.0	3.0	-	-
計画リソースでの実施	計画をしていた資金・人員で活動が完了したか	3.0	3.0	-	-
効果発現(当初の計画通りの効果が生み出されたか)					
効果測定	実施後に発現した効果を測定したか	3.0	3.0	-	-
受益者の参加	受益者の参加は計画通りだったか	3.0	3.0	3.0	-
想定効果の発現	参加者へ想定した効果が実現できたか	3.0	3.0	3.0	-
持続性(目的とする効果が持続する仕組みが担保されているか)					
効果の持続性	計画によって得られた効果が持続しているか	-	-	-	-
NPO機能の委譲	撤退後に地元組織へNPO機能の委譲ができていますか	2.5	2.5	2.5	2年連続で夏祭りを実施した仮設団地では今後の実施を目指している

This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent.

TOK 130305-CFJ事業評価 v1 28

I-2 ベンチ作り：全般的に評価は高いものの、全体計画の不在と住民の募集に課題を抱えていた

各項目5点満点

評価項目	評価理由	評価			評価がばらつく理由
		全体平均	CFJ スタッフ	CFJ 外部	
計画立案(目的の実現のために適切な計画が立案出来たか)					
ニーズの把握	受益者のニーズを把握できていたか	5.0	5.0	-	-
受益者の設定	受益者の設定をできていたか	4.0	4.0	-	-
ニーズに対する妥当性	ニーズを満たすために適切な計画だったか	2.0	2.0	-	全体の計画がなく、場当たりに進めてしまった
関係者の関わり	効果の最大化、運営の円滑化のための協議ができたか	2.5	2.5	-	前半は後半で行ったように製作時の積極的な住民募集ができていなかった
フィードバック	計画を適切に改善できたか	3.0	3.0	3.0	住民との関わり方、より効果的なベンチ設計など改善を実施
計画実施(立案された計画通りに実施をすることが出来たか)					
計画された活動の実施	計画をしていた活動が実施できたか	3.0	3.0	3.0	個々の活動は問題なく進めることができた
計画期間での実施	計画をしていた期間内で活動が完了したか	2.8	2.5	3.0	一部予定の実施期間を超えて実施した場合があったが概ね計画通り実施
計画リソースでの実施	計画をしていた資金・人員で活動が完了したか	3.0	3.0	-	想定通りに実施することができた
効果発現(当初の計画通りの効果が生み出されたか)					
効果測定	実施後に発現した効果を測定したか	3.0	3.0	-	製作時の参加人数調査、利用率調査を行った
受益者の参加	受益者の参加は計画通りだったか	2.8	2.5	3.0	前半は製作時の参加を得られなかった
想定効果の発現	参加者へ想定した効果が実現できたか	3.3	3.0	3.6	仮設団地でのイベントや屋外での食事会に使用されている
持続性(目的とする効果が持続する仕組みが担保されているか)					
効果の持続性	計画によって得られた効果が持続しているか	3.0	3.0	3.0	継続的に利用は続いている
NPO機能の委譲	撤退後に地元組織へNPO機能の委譲ができていますか	-	-	-	-

This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent.

TOK 130305-CFJ事業評価 v1 26

I-3 夏祭り：恒例行事として持続性を維持するために規模を縮小しても継続実施をするべきだったのではないか

計画立案	計画実施	効果発現	持続性
<ul style="list-style-type: none"> 聞き取り調査によってコミュニティ形成の必要性を特定 青学ボランティアの予定とコミュニティ形成の必要性およびスペースなど実施可能性を加味して実施団地を選定 参加者の参加見通しについても震災以前に行われていた夏祭りへの参加者がどの程度であったか聞き取りを行い、事前に目安をつけていた コミュニティの成熟度合いに合わせてCFJからアドバイスを実施(杉下団地に対する仮設団地周辺住民の招待) また青学ボランティアの関わり方についても住民の中に入ってコミュニケーションの活性化を行う形に改善 	<ul style="list-style-type: none"> 概ね計画通りに進めることができたが、住民により夏祭りに参加してもらうための施策が計画通りに進められなかった回も存在 <ul style="list-style-type: none"> - 持ち帰りしにくく、夏祭りへの滞在時間が長くなると考えられる容器の調達不備 - より住民のコミュニケーションが図られるようなベンチや屋台の設置案が未作成 準備期間や実施に必要なリソースは当初の計画通りに進めることができた 	<ul style="list-style-type: none"> 参加人数把握など定量的な効果測定に加えて、夏祭りの運営に携わった学生ボランティアへのヒアリングによる定量的な効果測定 参加人数は概ね計画通りに得られることができた また実際に子どもを含めた参加者が知り合うきっかけとなった模様 	<ul style="list-style-type: none"> 2年間連続で実施をした仮設団地では恒例行事という捉え方をされており、資金面の問題から規模は縮小するかもしれないが実施の見通しが高い 一方で1年目だけ実施をした仮設団地では今後の実施が期待し難い

This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent.

TOK 130305-CFJ事業評価 v1 29

I-2 ベンチ作り：案件の進展に合わせて全体計画の作成と事前の周知を行うことで、より高い効果を得られた可能性がある

計画立案	計画実施	効果発現	持続性
<ul style="list-style-type: none"> 聞き取り調査によってコミュニティ形成の必要性を特定 現地に対する理解、住民との関係性の進展に合わせて適切に受益者を変更 <ul style="list-style-type: none"> - 当初は関係性の作ることができた仮設団地で実施 - 規模の大きくコミュニティが希薄な団地 全体計画が存在しておらず、場当たり的に実施が行われた結果、最終的に完成したベンチの数は少ない印象 <ul style="list-style-type: none"> - 初期段階ではどのくらい作れるのか、またどのくらい必要なのか不明だった - ただし目安が立った後も全体計画が設計されなかった 前半は事前の参加者獲得に向けた取組が不足 <ul style="list-style-type: none"> - 前半は事前周知なく実施する場合も存在 - 後半は自治会や支援員と事前に協議した上で、より多くの参加者を獲得 実施していく中で様々な改善を実施 <ul style="list-style-type: none"> - 上記参加者獲得の方法 - 様々な住民に使ってもらえるよう、適切な高さへ設計変更・検証 	<ul style="list-style-type: none"> 各実施においては住民に主体性を持って製作してもらうなど問題なく進めることができた 短期的な計画に対してはほぼ想定期間で実施 また学生ボランティアを含めて、想定していた人的、資金リソース内で実施 	<ul style="list-style-type: none"> 定量・定性両面から効果測定を実施 <ul style="list-style-type: none"> - ベンチの使用率調査や設置数調査 - 住民や学生ボランティアに対するヒアリング 住民の巻き込み不足により前半は参加者が少ないこともあった 当初の想定通りの効果が発現 <ul style="list-style-type: none"> - ベンチの周りに住民が集まる状況ができていない - 中には外に出てきていなかった住民がベンチまで出てくるようなこともあった 	<ul style="list-style-type: none"> ベンチは現在も継続的に使用されており、今後にも継続的に使用されていく模様

This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent.

TOK 130305-CFJ事業評価 v1 27

II-1 読み聞かせ：地元団体とうまく協働して当初の計画以上の活動を実施することができた

各項目5点満点

評価項目	評価理由	評価			評価がばらつく理由
		全体平均	CFJスタッフ	CFJ外部	
計画立案(目的の実現のために適切な計画が立案出来たか)					
ニーズの把握	受益者のニーズを把握できていたか	3.0	3.0	-	地元団体の目指すところを理解し、CFJの方針と方向性の一致が高い団体を支援することができた
受益者の設定	受益者の設定をできていたか	3.0	3.0	-	地元団体の必要としていた支援をCFJが提供できた
ニーズに対する妥当性	ニーズを満たすために適切な計画だったか	4.0	4.0	4.0	必要の際にはお互いに関わり合いを持つことができた
関係者の関わり	効果の最大化、運営の円滑化のための協議ができたか	4.0	4.0	4.0	当初計画に加えて会計面のサポートを実施
フィードバック	計画を適切に改善できたか	4.0	4.0	4.0	-
計画実施(立案された計画通りに実施をすることが出来たか)					
計画された活動の実施	計画をしていた活動が実施できたか	3.0	3.0	3.0	当初の計画以上に地元団体の機能強化支援が実施できた
計画期間での実施	計画をしていた期間内で活動が完了したか	3.0	3.0	3.0	当初の計画に関しては計画期間内に実施することができた
計画リソースでの実施	計画をしていた資金・人員で活動が完了したか	3.0	2.0	4.0	当初の計画自体は計画リソース以下で実施することができた
効果発現(当初の計画通りの効果が生み出されたか)					
効果測定	実施後に発現した効果を測定したか	3.0	3.0	3.0	地元団体の活動について参加人数の調査を実施
受益者の参加	受益者の参加は計画通りだったか	3.8	3.5	4.0	当初の想定が少なかったが、想定以上の参加者を得ることが出来た
想定効果の発現	参加者へ想定した効果が実現できたか	4.0	4.0	4.0	活動自体の評価も高く、地元団体のNPO化を促進することができた
持続性(目的とする効果が持続する仕組みが担保されているか)					
効果の持続性	計画によって得られた効果が持続しているか	3.0	3.0	3.0	会計制度などNPO化に向けた動きは継続している
NPO機能の委譲	撤退後に地元組織へNPO機能の委譲ができていたか	-	-	-	-

This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent

TOK 130305-CFJ事業評価 v1 32

II-1 読み聞かせ：当初の計画では想定していなかったものの、計画を進める中でより効果的な取り組みを実施することができた

計画立案	計画実施	効果発現	持続性
<ul style="list-style-type: none"> 子どもに対する読み聞かせを行っている地元団体の機能強化を目的として実施 当初は県の助成金を受けた事業に関する協働を目標としており、申請のノウハウや第三者視点でのアドバイスの実施を計画していた 地元団体の主体性が高く、必要な際にはCFJにサポートを依頼する適切な関係を築くことができた また実施していく中で、NPO化を目指す地元団体に対して、NPO化に向けた会計制度の導入をサポートを追加実施 	<ul style="list-style-type: none"> 当初計画をしていた助成事業の実施に関しては計画通りに実施することができた また実施期間に関しても助成事業の準備段階から問題なく進めることができた ただし会計面でのサポートは当初の想定外であり、CFJの人的リソースが計画以上に割られることとなった 	<ul style="list-style-type: none"> 助成事業の参加者数の調査や聞き取り調査の実施を行った 参加者の数は当初の想定が少なかった面もあるものの、想定以上の住民参加が得られた 地元団体のNPO化に関してその端緒を開くことができ、地元団体と外部との協働による能力強化という可能性を示すことができた 	<ul style="list-style-type: none"> CFJの支援内容は今後地元団体のみでの実施が可能なレベルまで強化をすることができた

This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent

TOK 130305-CFJ事業評価 v1 33

I-4 はまっぺし：CFJの取り組みをきっかけとして一部ではすでに独自の食事会が開催されている

各項目5点満点

評価項目	評価理由	評価			評価がばらつく理由
		全体平均	CFJスタッフ	CFJ外部	
計画立案(目的の実現のために適切な計画が立案出来たか)					
ニーズの把握	受益者のニーズを把握できていたか	5.0	5.0	-	避難所や仮設団地への聞き取りを通してコミュニティの必要性を認識
受益者の設定	受益者の設定をできていたか	4.0	4.0	-	規模の大きく、コミュニティの形成が遅れている仮設団地を中心に実施
ニーズに対する妥当性	ニーズを満たすために適切な計画だったか	4.0	4.0	-	事前の聞き取りにより参加者が集まるかどうかを調査した
関係者の関わり	効果の最大化、運営の円滑化のための協議ができたか	2.8	2.8	2.7	支援員、自治会婦人部と協議をおこなった
フィードバック	計画を適切に改善できたか	3.0	3.0	3.0	参加者を増やすための会場変更など改善が見られた
計画実施(立案された計画通りに実施をすることが出来たか)					
計画された活動の実施	計画をしていた活動が実施できたか	3.0	3.0	3.0	計画通り進めることができた
計画期間での実施	計画をしていた期間内で活動が完了したか	3.0	3.0	-	計画通り進めることができた
計画リソースでの実施	計画をしていた資金・人員で活動が完了したか	3.0	3.0	-	計画通り進めることができた
効果発現(当初の計画通りの効果が生み出されたか)					
効果測定	実施後に発現した効果を測定したか	3.0	3.0	-	参加人数と学生を含めたスタッフのヒアリングを行い改善点を特定
受益者の参加	受益者の参加は計画通りだったか	3.9	4.0	3.8	当初の想定以上の参加を得ることができた
想定効果の発現	参加者へ想定した効果が実現できたか	3.0	3.0	3.0	それまで会話がなかった住民同士のコミュニケーションを引き出した
持続性(目的とする効果が持続する仕組みが担保されているか)					
効果の持続性	計画によって得られた効果が持続しているか	-	-	-	-
NPO機能の委譲	撤退後に地元組織へNPO機能の委譲ができていたか	4.0	4.0	4.0	団地によってははまっぺしをきっかけに同様のイベントを独自に開催

This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent

TOK 130305-CFJ事業評価 v1 30

I-4 はまっぺし：CFJの活動がきっかけとなり、すでに独自に食事会を行っている団地も存在しており継続性は担保できた

計画立案	計画実施	効果発現	持続性
<ul style="list-style-type: none"> 聞き取り調査によってコミュニティ形成の必要性を特定 各仮設団地の様子がわかってきた段階での実施であったため、住民の数が多くコミュニティ構築がより必要な団地を選定 参加者が得られそうかどうかを事前の聞き取り調査を行い確認 また事前に協議を行い、支援員の影響力が強い仮設団地では支援員を含めて巻き込むことができた 複数回実施した仮設団地では、参加者人数に対して会場が狭かったため会場を変更するといった改善が加えられた 	<ul style="list-style-type: none"> 活動の内容、準備も含めた実施期間、資金面・人的リソースに関しては全て計画通りに進めることができた 	<ul style="list-style-type: none"> また学生ボランティアを含めたミーティングで改善案を協議し、会話の少ない住民のつなぎ役として学生ボランティアが動くようにするなど改善点が特定された 住民主体性を意識し、支援員などの協力を得た結果、想定以上の参加人数を得ることができた 参加者に関してはそれまであまり話をしたことがない住民同士のコミュニケーションを取る機会が持たれた 	<ul style="list-style-type: none"> CFJの活動がきっかけとなり、独自の食事会を催している仮設団地もすでに存在

This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent

TOK 130305-CFJ事業評価 v1 31

Ⅲ-1 こころのケア：外部協力者との関わりがあったため、ニーズをすべて満たす計画を立案することができなかった

各項目5点満点

評価項目	評価理由	評価			評価がばらつく理由
		全体平均	CFJスタッフ	CFJ外部	
計画立案(目的の実現のために適切な計画が立案出来たか)					
ニーズの把握	受益者のニーズを把握できていたか	2.5	2.5	2.5	-
受益者の設定	受益者の設定をできていたか	2.5	2.5	2.5	-
ニーズに対する妥当性	ニーズを満たすために適切な計画だったか	1.8	1.5	2.0	-
関係者の関わり	効果の最大化、運営の円滑化のための協議ができたか	1.8	1.5	2.0	-
フィードバック	計画を適切に改善できたか	3.5	4.0	3.0	-
計画実施(立案された計画通りに実施をすることが出来たか)					
計画された活動の実施	計画をしていた活動が実施できたか	3.0	3.0	3.0	-
計画期間での実施	計画をしていた期間内で活動が完了したか	3.0	3.0	3.0	-
計画リソースでの実施	計画をしていた資金・人員で活動が完了したか	3.0	3.0	3.0	-
効果発現(当初の計画通りの効果が生み出されたか)					
効果測定	実施後に発現した効果を測定したか	2.3	2.5	2.0	-
受益者の参加	受益者の参加は計画通りだったか	3.0	3.0	3.0	-
想定効果の発現	参加者へ想定した効果が実現できたか	3.1	2.5	3.7	-
持続性(目的とする効果が持続する仕組みが担保されているか)					
効果の持続性	計画によって得られた効果が持続しているか	2.4	2.0	2.7	-
NPO機能の委譲	撤退後に地元組織へNPO機能の委譲ができていますか	2.4	2.8	2.0	-

This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent

TOK 130305-CFJ事業評価 v1 36

Ⅱ-2 沿岸南部杯：地元団体とのやり取りが十分にできなかったため、目標とした継続性を担保することができなかった

各項目5点満点

評価項目	評価理由	評価			評価がばらつく理由
		全体平均	CFJスタッフ	CFJ外部	
計画立案(目的の実現のために適切な計画が立案出来たか)					
ニーズの把握	受益者のニーズを把握できていたか	2.5	2.5	-	-
受益者の設定	受益者の設定をできていたか	2.5	2.5	-	-
ニーズに対する妥当性	ニーズを満たすために適切な計画だったか	3.0	3.0	-	-
関係者の関わり	効果の最大化、運営の円滑化のための協議ができたか	2.5	2.0	3.0	-
フィードバック	計画を適切に改善できたか	-	-	-	-
計画実施(立案された計画通りに実施をすることが出来たか)					
計画された活動の実施	計画をしていた活動が実施できたか	2.7	2.3	3.0	-
計画期間での実施	計画をしていた期間内で活動が完了したか	2.5	2.0	3.0	-
計画リソースでの実施	計画をしていた資金・人員で活動が完了したか	3.0	2.0	3.0	-
効果発現(当初の計画通りの効果が生み出されたか)					
効果測定	実施後に発現した効果を測定したか	3.0	3.0	3.0	-
受益者の参加	受益者の参加は計画通りだったか	3.0	3.0	3.0	-
想定効果の発現	参加者へ想定した効果が実現できたか	2.5	2.0	3.0	-
持続性(目的とする効果が持続する仕組みが担保されているか)					
効果の持続性	計画によって得られた効果が持続しているか	2.0	2.0	2.0	-
NPO機能の委譲	撤退後に地元組織へNPO機能の委譲ができていますか	-	-	-	-

This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent

TOK 130305-CFJ事業評価 v1 34

Ⅲ-1 こころのケア：事前の計画段階で外部協力者との出口戦略を含めた計画の立案が必要

計画立案	計画実施	効果発現	持続性
<ul style="list-style-type: none"> 外部協力者を巻き込んで聞き取り調査を行い、公的な支援のない保育園を受益者として特定 外部協力者との事前の協議、また追加での提案ができなかったため、必要な計画の立案ができなかった <ul style="list-style-type: none"> 外部協力者との協働がすでに決まっており、計画段階から事業期間内に全てが終了しない前提で計画がたてられた また外部協力者に対してより多くの回数の実施を提案することができなかった 個々の実施に関しては、当初は予定していなかった、保育士同士が思いを共有する場を提供するなど改善が加えられた 	<ul style="list-style-type: none"> 計画内容については、活動の実施、期間、リソースについて問題なく進めることができた 	<ul style="list-style-type: none"> 効果測定に関してはアンケート内容では不十分であり、特に保育士に関して前回参加者が参加していない理由がわからないなど追跡調査ができていなかった 受益者と外部協力者のスケジュールを加味して、参加者の最大化を行った 受益者は地元団体ではなく、被災者ではない外部団体による実施を高く評価 	<ul style="list-style-type: none"> 今回の活動で十分に効果を上げていると考えられる参加者も存在 多くの参加者は今後も継続的なケアが必要。CFJ撤退後の活動継続は受益者と外部協力者が協議を行っているものの、未だ不透明

This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent

TOK 130305-CFJ事業評価 v1 37

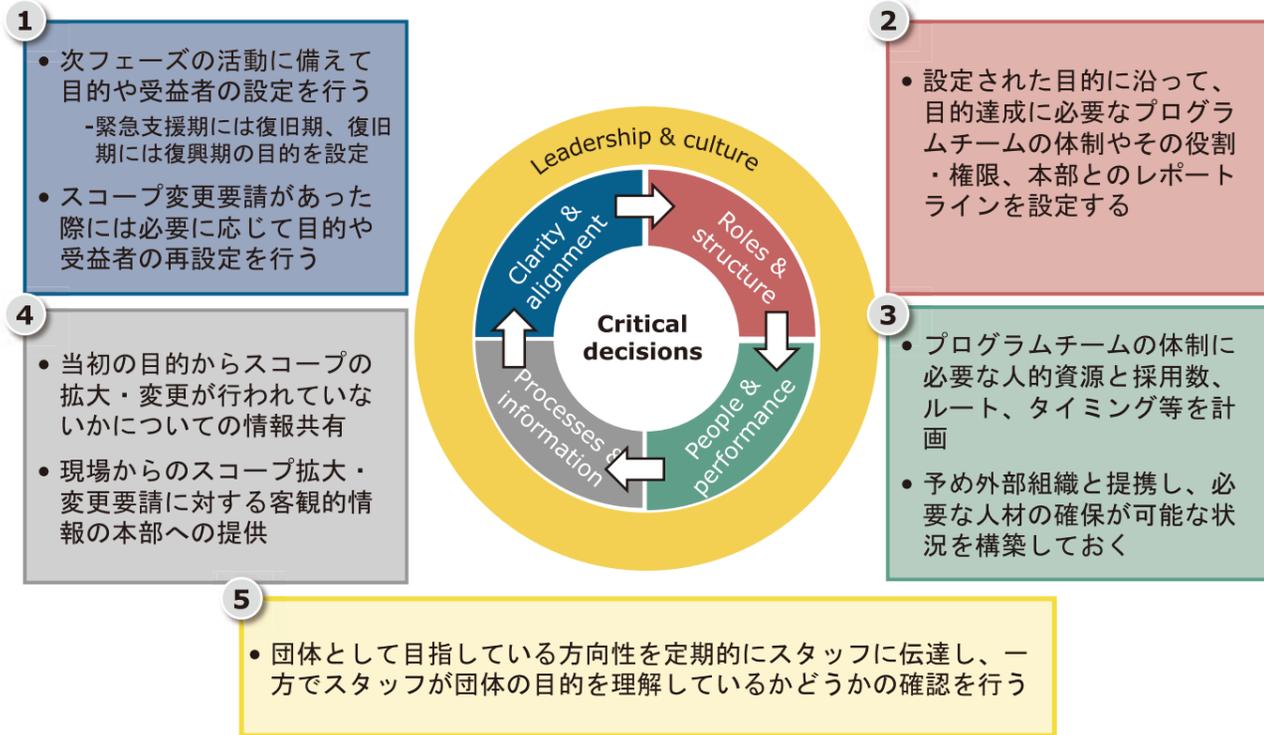
Ⅱ-2 沿岸南部杯：CFJとしての目標に対する理解を得た上で案件の実施を行うべきだった

計画立案	計画実施	効果発現	持続性
<ul style="list-style-type: none"> 必ずしもCFJと実行委員会の目的のすりあわせ、CFJの目的を地元団体に十分理解してもらうことができていなかった <ul style="list-style-type: none"> CFJは継続的に野球大会を実施できるように機能強化することを目的として実施 一方、実行委員会は12年の野球大会実施を特に重視しており、継続性の担保はあまり重視されなかった 関わるべき関係者とは協議を行うことができていたが、互いの目的をすり合わせるができなかった 実行委員会の強いニーズである12年の大会実施に対しては適切な計画が立案することができた 	<ul style="list-style-type: none"> 地元団体に対してCFJから提案書を渡すなど効率的な関係を目指したものの、協議が平行線をたどることも多かった 野球大会の実施以後に追加依頼が発生した結果、計画期間の長期化、リソースの追加が見込まれる(継続中) 	<ul style="list-style-type: none"> 野球大会の参加者数の調査を行い、例年通りの参加者が得られた 野球大会自体は例年通りの効果を上げることでできたものの、実行委員会に対する継続性の担保はできなかった 	<ul style="list-style-type: none"> CFJとの協働により継続性は重視されているが、次回大会以降の実施目処はついていない <ul style="list-style-type: none"> CFJとの協働により、それまで重視されなかった継続性を次回以降目指していくという方針にある 今のところ次回大会しか実施の見通しがたっていない

This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent

TOK 130305-CFJ事業評価 v1 35

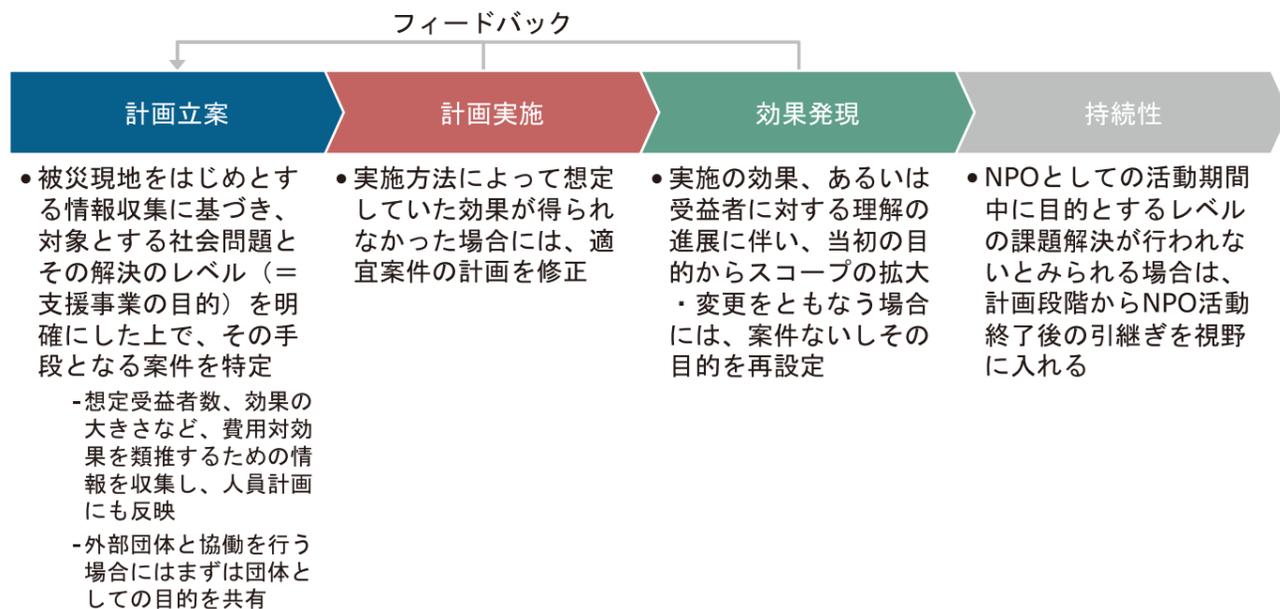
先を見越した事業目的の明確化とそれに見合う組織・人員体制の整備を前提とし、それらに必要な意思決定を行うことが成功の鍵



This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent

TOK 130305-CFJ事業評価 v1 41

また個別案件の設定においても、支援の目的を明確にしたうえでその手段として案件を計画し、目的の達成度に応じて軌道修正



This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent

TOK 130305-CFJ事業評価 v1 42

Ⅲ-2 グリーフワーク：目的に対して十分に計画がないまま案件をスタートした結果、受益者への機能委譲はできなかった

各項目5点満点

評価項目	評価			評価の理由	評価がばらつく理由
	全体平均	CFJスタッフ	CFJ外部		
計画立案(目的の実現のために適切な計画が立案出来たか)					
ニーズの把握				聞き取り調査を行い、グリーフワークに対するニーズのある対象者を特定。ただし当初目指した効果を十分に実現するためには、より長期の実施計画が必要だった	-
受益者の設定	2.4	2.3	2.5	受益者の設定をできていたか	
ニーズに対する妥当性				ニーズを満たすために適切な計画だったか	
関係者の関わり	2.3	2.5	2.0	効果の最大化、運営の円滑化のための協議ができたか	外部協力者との関わりを十分に取ることができなかった
フィードバック	3.0	3.0	3.0	計画を適切に改善できたか	外部協力者のスキルが高く、参加者に合わせて内容の変更が行われた
計画実施(立案された計画通りに実施することが出来たか)					
計画された活動の実施	3.0	3.0	3.0	計画に従って活動は実施することが出来たか	-
計画期間での実施	2.3	2.5	2.0	計画をしていた期間内で活動が完了したか	実施の立ち上がりが遅れたため、実施回数が少なくなってしまった
計画リソースでの実施	3.5	3.0	3.0	計画をしていた資金・人員で活動が完了したか	実施に対するリソースは十分であり、問題なく進めることができた
効果発現(当初の計画通りの効果が生み出されたか)					
効果測定	3.0	3.0	3.0	実施後に発現した効果を測定したか	アンケートを実施し、効果の測定を行った
受益者の参加	3.0	3.0	3.0	受益者の参加は計画通りだったか	外部協力者、受益者との調整を行い、参加者を集めることができた
想定効果の発現	2.8	2.5	3.0	参加者へ想定した効果が実現できたか	参加者への効果は高かったが、当初の目標の実現には至らなかった
持続性(目的とする効果が持続する仕組みが担保されているか)					
効果の持続性	2.7	2.5	3.0	計画によって得られた効果が持続しているか	参加者に対する効果は持続している
NPO機能の委譲	2.2	2.0	2.4	撤退後に地元組織へNPO機能の委譲ができていないか	継続実施が必要ではあるが、CFJ撤退後の継続性は担保されていない

This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent

TOK 130305-CFJ事業評価 v1 38

Ⅲ-2 グリーフワーク：事前の計画段階で外部協力者と協議を行い、効果を最大化する計画の立案が必要だった

計画立案	計画実施	効果発現	持続性
<ul style="list-style-type: none"> 聞き取り調査により公的な支援が足りていない支援相談員と支援員を受益者と設定 外部協力者との協議や情報共有には改善の余地があった <ul style="list-style-type: none"> -こころのケア同様、外部協力者との協働がすでに決まっており、計画段階から事業期間内に全てが終了しない前提で計画が立てられた -また個々の実施においても、外部協力者は事前に参加者のより詳細なバックグラウンドを求めている 受益者の精神的な支援とともに、受益者団体内でのPeer supervisionの実現を目的としたものの、十分な期間や実施回数が設定されなかった 	<ul style="list-style-type: none"> 活動の実施、リソースに関しては問題なく進めることができた ただし計画段階のCFJの人的リソース不足から受益者団体への実施打診が遅れたため、実施回数が少なくなってしまった可能性がある 	<ul style="list-style-type: none"> 参加人数や受益者団体に対する聞き取りにより効果の測定を行った 受益者団体との協議が十分に出来ていたため、一部は研修として取り入れることにより受益者の最大化ができた 個々の実施に対する効果は高かったものの、当初の目標を達成するには至らなかった <ul style="list-style-type: none"> -自身も被災者である受益者に対する効果は高く、業務に対する考え方を肯定的に見ることができるようになった -しかし実施回数が少なく、当初の目的であるPeer supervisionの実現には至らなかった 	<ul style="list-style-type: none"> 支援員の研修で少人数制の意見交換方式のやり取りが取り入れられ、グリーフワークの考え方が取り入れられている しかしCFJ撤退後の支援者団体での自立的な実施や外部協力者を巻き込んだ継続的な実施は担保できていない

This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent

TOK 130305-CFJ事業評価 v1 39

実施案件情報

チャイルド・ファンド・ジャパンは、国内外から託されたご寄付をもとに、東日本大震災緊急・復興支援事業として以下の活動を実施することができました。

寄せられた寄付総額は、2013年2月28日現在で245,580,346円(チャイルド・ファンド・アライアンス加盟団体から合計153,553,330円、国内寄付者から合計77,303,794円、中国のNPO SmileAngel Foundationから14,723,222円)です。

■緊急期～復旧期

案件名	年度	日付	場所	内容
緊急支援物資支援	2011	3月17日	福島県南相馬市	食糧、野菜、日用品 合計約5トン
	2011	3月24日	宮城県名取市、仙台市	
	2011	4月1日	宮城県名取市、仙台市	
	2011	4月9日	宮城県石巻市	
	2011	4月15日	岩手県大船渡市	
We are with you! ～あなたは一じゃない～	2011	4月1日～8月31日	福島県青柳町、岩手県内	フリビーン、ネパール、日本の子どもたちからの応援メッセージを添えた文房具等を以下に届ける: (1)岩手県の小・中学校99校16,000人 (2)大船渡市、陸前高田市等に住むフリビーンと日本人を両側に持つダルの子どもたち30人 (3)南相馬市の小学校の児童1,504人
被災後の子どものこころのケアの手引き	2011	4月11日	東京都	宮城県、東京都、静岡県、岩手県、福岡県、奈良県、千葉県、大阪府、愛知県、鹿児島県、岡山県、熊本県、兵庫県、沖縄県、京都府、新潟県、青森県、鳥取県、山形県、埼玉県、高知県、群馬県の送付希望者以下に配布(2013年3月1日現在): 日本語版:15,532冊、英語版:664冊、中国語版:393冊、ハンガール語版:370冊、タガログ語版:340冊
被災後の子どものこころのケアのワークショップ	2011	6月25日	宮城県仙台市	保育士・幼稚園教諭など(22名)
	2011	7月17日	岩手県滝沢村	キャンパスタッフ(28名)
	2011	8月6日	岩手県滝沢村	キャンパスタッフ(5名)
	2011	9月19日	岩手県鹿野村	キャンパスタッフ、リーダー候補生、補助ボランティア(14名)
	2011	10月1日	宮城県米登市	被災地在住の外国出身の母親とその支援者(40名)
	2011	11月5日	岩手県盛岡市	東北・北海道地区のガールスカウトリーダー(68名)
対人援助者のためのグリーフワークプログラム	2011	7月24日	岩手県盛岡市	ソーシャルワーカー(3名)
	2011	8月14日	宮城県石巻福祉避難所	ソーシャルワーカー、看護師、医師(4名)
	2011	8月15日	宮城県石巻福祉避難所	ソーシャルワーカー(6名)
	2011	9月4日	岩手県盛岡市	ソーシャルワーカー、心理療法士(8名)
	2011	9月18日	岩手県盛岡市	ソーシャルワーカー(8名)
	2011	8月23日	東京都武蔵野赤十字病院	ソーシャルワーカー、保健師(6名)
	2011	10月23日	京都府京都市	ソーシャルワーカー(8名)
	2011	10月23日	京都府京都市	ソーシャルワーカー(8名)

■大船渡市復興支援プログラム(復旧期～復興期)

長浜仮設住宅団地 地域公民館建設	2012	10月12日	長洞	完成引渡式
長洞仮設住宅団地 自治会組織形成	2011	11月	ひらく石	
	2012	3月4日	長洞	長洞地域公民館 設立総会
長洞仮設住宅団地 コミュニティファーム「友結ファーム」	2012	2月3日	長洞	コミュニティファーム 説明会
集会所入人口の拡張工事	2011	10月20日～11月12日	山岸田など計20ヶ所	集会所、談話室200カ所の軒拡張工事
ベンチ・掲示板づくり	2011	7月18日～12月17日	大田田など計25ヶ所	ベンチ、掲示板作り
	2012	6月27日～12月14日	山岸田など計25ヶ所	ベンチ、テーブル作り
「はまっし」(もちり食卓会)開催	2011	8月27日～	大田田など計5ヶ所	はまっし
	2012	10月6日	山岸	芋っこ会
イベント関連支援	2012	10月14日	杉下	芋の子汁会
	2012	10月20日	大田	秋の味覚祭り

会計報告は2011年度・2012年度事業報告書にてご報告します。
(団体ホームページで公開しています。
ただし、2012年度分は2013年7月頃公開予定です)。

案件名	年度	日付	場所	内容
こびるの会	2011	8月21日～9月13日	ひらく石田など計4ヶ所	こびるの会
干し柿作り	2011	11月3日～11月23日	清水田など計7ヶ所	干し柿作り
聞き取り調査	2011	5月3日～8月27日	大船渡市内避難所	第1期聞き取り調査
	2011	8月2日～3日	地ノ森、杉下	ベンチ使用状況調査
	2012	11月14日～2月17日	大船渡市、岩手県、山形、青森	第2期聞き取り調査
夏祭り	2011	8月6日	長洞	夏祭り主催
	2011	8月7日	米崎町ふるさとセンター	七夕祭り・盆踊り主催
	2011	8月13日	地ノ森	納涼会共催
	2011	8月14日	杉下	納涼会共催
	2012	8月14日	杉下	納涼盆踊り大会共催
学童保育	2011	7月～8月(120名)10月	キッズクラブいわわ	学童保育支援
	2011	7月～8月(130名)10月	にこにこ所こクラブ	学童保育支援
学習支援	2011	8月3日～9月13日	大船渡中学校	学習支援
社会科見学・遠足等課外活動の機会確保	2011	10月	岩手県内小中学校のうち15校	社会科見学、遠足等課外活動の実施支援
	2012	7月、9月	大船渡市内小中学校のうち15校	修学旅行の費用の一部支援
大船渡小学校備品整備	2011	3月	大船渡小学校	
卒業アルバム制作支援	2011	3月	大船渡市内小中学校全22校	
	2012	3月		
新年書初め大会	2012	1月6日	起喜来中学校	新春書き初め大会
	2012	1月7日	大船渡地区公民館	新春書き初め大会
読み聞かせ講座	2012	2月	大船渡市内避難所	
冬の朗読会	2011	11月29日	No.3ギャラリー(大船渡市盛岡)	朗読会
沿岸南部杯少年野球大会	2011	10月～11月		賞品協力
	2012	10月～11月		実施支援
越喜来保育所	2011	3月30日	越喜来	仮設保育室完成引き渡し式
とどけ!ぼくら、わたしたちの声	2012	2月14日15日	大船渡市児童館(仮)・こびるの会	船渡大学金山研究会協働、仮設住宅団地からの子どもたちの声をラジオで発信し、子どもたちの声をコミュニティづくりに反映させる機会を提供する。
鯉のぼり子どものついで	2012	5月5日	福祉の里センター	第45回鯉のぼり子どもの集い参加協力
節分子ども豆まき	2012	2月3日	大立仮設住宅団地自治会企画による豆まきイベントに協力	
修学旅行支援	2012	8月	大船渡市内小中学校のうち15校	修学旅行の費用の一部支援
猪川地区交流事業	2011	10月1日	猪川地区公民館	猪川地区の交流を目的とした催し
復興食堂	2011	11月5～6日	福祉の里センター	大船渡の若年層の交流促進のためのイベント参加協力
コレール配布	2011	7月16日	杉下	コレール配布
	2011	10月12日	後ノ入	コレール配布
集団回廊「こころの劇場」鑑賞会 輸送費支援	2012	10月1日	リアスホール	会場までの輸送費(バス)を支援
小学校陸上競技記録会 輸送費支援	2012	9月19日	大船渡市民文化会館	参加する選手とその応援団の会場までの輸送費(バス)を支援
小中学校音楽会輸送費支援	2012	10月	リアスホール	参加児童・生徒の会場までの輸送費(バス)を支援
野球教室	2011	8月2日3日	大船渡市三陸 BAO海洋センター多目的グラウンド	大船渡市立第一中学校、大船渡中学校、米崎中学校、日頃中学校、越喜来中学校、越喜来中学校、吉浜中学校、赤崎中学校の各野球部員と監督が参加
子どものこころのケア(大船渡)	2011	11月4日	私立大船渡保育園	事前調査
	2011	12月12日	私立大船渡保育園	保護者15人個別相談・講習
	2012	2月7日	私立大船渡保育園	保護者、大船渡保育園の保育士、大船渡市保育会に所属する市内9つの保育園の主任保育士、保育士14人の個別相談
	2012	3月6日	私立大船渡保育園	保護者、大船渡保育園の保育士、大船渡市保育会に所属する市内9つの保育園の主任保育士、保育士14人の個別相談
	2012	5月10日	岩手県盛岡(情報交流センター「アイーナ」)	(社)岩手県青少年育成委員会と会員団体25団体
	2012	6月19日	私立大船渡保育園 私立赤崎保育園	大船渡保育園の保育士、大船渡保育園に子どもを預けている保護者、赤崎保育園の保育士への個別相談(4名)と講習会(5名)
	2012	8月20日	私立大船渡保育園 私立明和保育園	大船渡保育園の保育士、大船渡保育園に子どもを預けている保護者、明和保育園の保育士への個別相談(8名)、講習会(16名、20名)
	2012	9月13日	私立大船渡保育園	大船渡保育園の保育士、大船渡保育園に子どもを預けている保護者への個別相談(15名)
	2012	10月23日	私立大船渡保育園 私立盛保保育園	大船渡保育園の保育士、大船渡保育園に子どもを預けている保護者、盛保保育園の保育士への個別相談(4名)、講習会(8名)
	2012	12月3日	私立大船渡保育園	大船渡保育園の保育士、大船渡保育園に子どもを預けている保護者、猪川・赤崎・米崎・明和保育園の保育士への個別相談(15名)と講習会
グリーフワーク(大船渡)	2011	11月20日		生活支援相談員8名参加
	2012	6月16日	福祉の里センター	生活支援相談員17名参加
	2012	9月29日	リアスホール アトリエ	仮設住宅支援事業 支援員14名参加
	2012	12月16日	福祉の里センター	仮設住宅支援事業 支援員11名参加

改善の方向性

目的をコアとした意思決定を進めるために、理事会、本部、現場が一体となった体制を構築すべき

	Clarity & Alignment	Role & Structure	People & Performance	Processes & Information	Leadership & Culture
理事会	<ul style="list-style-type: none"> 本部の立案した目的が団体のvisionに沿っているか確認 	<ul style="list-style-type: none"> - 	<ul style="list-style-type: none"> 本部での人材採用に対する情報提供・人材紹介等の支援 	<ul style="list-style-type: none"> - 	
本部	<ul style="list-style-type: none"> 事業の目的(受益者、支援レベル等)を立案 目先だけでなく次の段階も見越した目的設定 	<ul style="list-style-type: none"> 目的達成に必要なプログラムチームの体制やその役割・権限、本部とのレポートラインを設定 	<ul style="list-style-type: none"> 必要な人的資源と採用数、ルート、タイミング等を計画、採用実行 予め外部組織と提携し、必要な人材の確保が可能な状況を構築しておく 	<ul style="list-style-type: none"> 現場から提案のあった目的拡大・変更を承認 (再度目的・受益者を設定) 	<ul style="list-style-type: none"> 各案件を統一したフォーマットで管理することにより事業の方向性を確認する
現場	<ul style="list-style-type: none"> 目的設定に向けて、受益者のニーズ調査や現地の情報を本部へ提供 	<ul style="list-style-type: none"> 現地での目的達成に必要な体制や権限の本部への提言 本部の設定した体制・役割に沿った現地チームの設計 	<ul style="list-style-type: none"> 本部で作成する人員・採用計画への現地ニーズのインプット 本部計画に沿った採用実行 	<ul style="list-style-type: none"> 事業目的に即した活動進捗を本部に情報共有 ニーズ変化に合わせた目的の拡大・変更を本部に提案 	

This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent. TOK 130305-CF)事業評価 v1.43

案件の管理フォーマットを作成し、案件の各段階でチェックを行い案件が団体の目標に沿って進んでいることを確認

案件の概要	
受益者	
達成目標	
必要資金	必要人工

	タイムライン	各段階におけるチェック
<ul style="list-style-type: none"> XX年XX月: XX年XX月: 	<p>評価内容</p> <p>受益者のニーズを把握できていたか</p> <p>受益者の設定をできていたか</p> <p>ニーズを満たすために適切な計画だったか</p> <p>効果の最大化、運営の円滑化のための協議ができたか</p> <p>計画を適切に改善できたか</p> <p>計画をしていた活動が実施できたか</p> <p>計画をしていた期間内で活動が完了したか</p> <p>計画をしていた資金・人員で活動が完了したか</p> <p>実施後に発現した効果を測定したか</p> <p>参加者の参加は計画通りだったか</p> <p>参加者へ想定した効果が実現できたか</p> <p>計画によって得られた効果が持続しているか</p> <p>撤退後に地元組織へNPO機能の委譲ができていたか</p>	<p>チェック</p> <p>評価者</p> <p>理事会</p> <p>本部</p> <p>本部</p> <p>現場</p> <p>本部</p>

This information is confidential and was prepared by Bain & Company solely for the use of our client; it is not to be relied on by any 3rd party without Bain's prior written consent. TOK 130305-CF)事業評価 v1.44



写真:CCF総主事ミルズ博士と支援を受けた日本の子どもたち。第二次大戦後、アメリカの民間団体、CCF (Christian ChildrenFund:キリスト教児童基金)が日本の戦災孤児への支援を始めました。

チャイルド・ファンド・ジャパンとは？

1975年より、アジアを中心に貧困の中で暮らす子どもの健やかな成長、家族と地域の自立を目指した活動をしています。活動をとおして人と人が出会い、お互いに理解を深め、つながることを大切にしています。



すべての子どもに開かれた未来を約束する国際社会の形成

【愛のバトンタッチ】

チャイルド・ファンド・ジャパンは、第二次世界大戦後、海外から支援を通して、日本の戦災孤児の成長を守ることから活動を始めました。時代が変わり、支援の受け手から担い手へと立場が変わっても、そこに一人ひとりの子どもが希望を持って生きることのできる社会を目指す姿勢は変わりません。



生かす生かされる国際協力を通じて子どもの権利を守る

【子どもの笑顔のために】

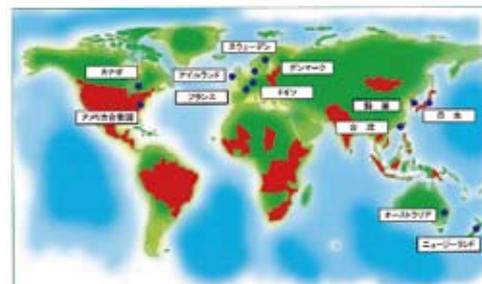
チャイルド・ファンド・ジャパンは、ビジョンを達成するために、支援を通じてつながるすべての人々が、様々な違いを超えて、お互いが人生に意味を見出し、「生きていてよかった」と思える国際協力を実践することを通して、子どもの権利を最優先に位置づけた活動を展開します。

1952年にはCCFの日本事務所として、社会福祉法人基督教児童福祉会 (CCWA) が設立され、アメリカやカナダの人々から支援が始まりました。その後、支援は拡大し、1974年のCCFの支援終了までに延べ86,000名の子どもが支援されました。1974年にCCFの支援が終了した翌年、1975年にCCWAはその愛の精神を受け継ぎ、国際精神里親運動部 (現:チャイルド・ファンド・ジャパン) を創始しました。そして日本のNGOの草分けとして、アジアの国々の中でも特に、子どもたちが厳しい生活を強いられているフィリピンに目を向け、支援を始めました。

- 1975年 フィリピンでスポンサーシップ・プログラムを開始
- 1991年 東京弁護士会より第5回人権賞を受賞
- 1995年 ネパールで保健事業支援開始
- 2001年 全国社会福祉協議会の会長特別表彰を受賞
- 2005年 特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパンへ法人変更
- 2006年 スリランカでスポンサーシップ・プログラムを開始
- 2009年 国税庁長官より「認定NPO法人」に認定される
- 2010年 ネパールでスポンサーシップ・プログラムを開始
- 2011年 東日本大震災緊急・復興支援事業を開始 (2013年3月終了)

チャイルド・ファンド・アライアンスについて

チャイルド・ファンド・アライアンスは、人種、宗教、性別、国籍を問わず世界の子どもたちに、効果的な支援活動をするためのネットワークで、子どもたちに向けたスポンサーシップ活動を行う12団体で構成されています。チャイルド・ファンド・ジャパンは2005年4月に加盟しました。



● チャイルド・ファンド・アライアンスの加盟団
● チャイルド・ファンド・アライアンスの支援団体

歩みとともに

特定非営利活動法人 チャイルド・ファンド・ジャパン

東日本大震災 緊急・復興支援事業 報告書

発行日 2013年3月15日
発行者 特定非営利活動法人 チャイルド・ファンド・ジャパン
理事長 深町正信
事務局長 小林 毅
〒167-0041 東京都杉並区善福寺 2-17-5
TEL 03-3399-8123
FAX 03-3399-0730
E-mail childfund@childfund.or.jp
U R L www.childfund.or.jp
編集・印刷 株式会社 東海新報社
〒022-0002 岩手県大船渡市大船渡町字鷹頭 9-1
TEL 0192-27-1000
FAX 0192-27-2154

